

新加坡志

六

20 1 2 3 4 5 6 7 8 9 130 1 2 3 4 5

L26



514
32828

利根川圖志卷六

下總 布川 赤松宗且 義知 著



香取浦 香取志云此の海西の方ハ利根川ハ續キ東ハ銚子ハ至
 る事十里餘北の方ハ潮來ハ至リて一里餘乾ハ霞ガ浦ハ至
 死て是ハ十里餘良鹿嶋息栖ハつくる夏三里ハかくのむと云
 大河たるを以て古一ハより渡リ難キ浦とモ故ハ香取の浦同
 トク海又沖あどハ詠る古歌多くあり先海と詠るハ万葉集ハ
 人丸 大船の香取の海ハ愠ハろハ如何ある人ハ物思ハざら
 む又浦と詠るハ續千載集ハ定家 夏夜香取の浦の假寐ハ浪
 のよるハ通ハ秋風ハ沖と詠るハ家集家隆 今日よりハ幣
 帛取祭ハ船人の香取の沖ハ風向ハ那リ此外諸書ハ多くあり
 十六嶋 本名新嶋と云ハ香取浦洋中ハあり香取志云斯て數百

利根川

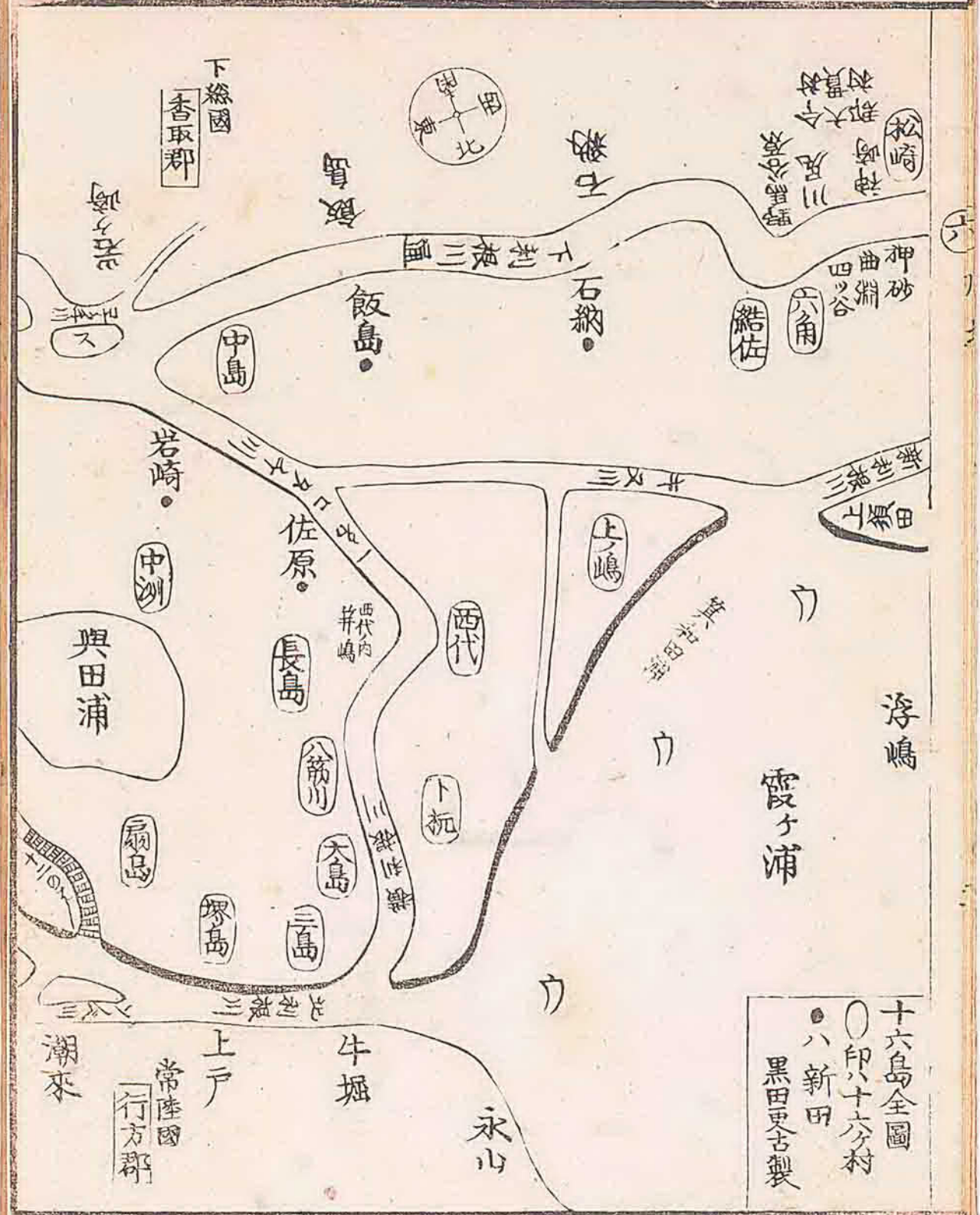
の星霜を經るまふく洋中ふ自うら洲出來年を積て稍大も也
 爰小天正十八年水陸田を開き始め上島まづ成就を石田主馬
 亮とよめる者吉田左太郎ふ就て 東照神君ふ言上を神君
 たりこめされ吾治國の始め新嶋を開くものと願ふ所あり平相
 國清盛自己の功を以て兵庫の築島を立らる今家康が徳ふ回
 て新島おのづから出來を喜悅の至りと仰らる八筋川西代ト
 抗班田成就一同十九年大久保重兵衛ふ仰せて夫役を許さる
 らる蠲符を賜る慶長十年長嶋出來同十九年六角をむらる
 元和三年石納飯嶋寛永元年大嶋を開き同三年嘉藤洲同五年
 堀嶋同七年結佐同八年中洲同十五年礪山扇島ふれて然るも
 天正十八年より寛永十五年ふ至るまで三代五十三年ふりて
 十六嶋班田の功成就をよきを新嶋といふ此島残らば 國初
 の御先蹤ふ隨ひ後御兩代も同トく蠲符を賜る云

上の嶋結佐六角松崎西代中嶋おの六ヶ村を上新嶋と唱へ八
 筋川ト抗大嶋三嶋堀嶋扇嶋加藤洲礪山中洲長嶋此十ヶ村を
 下新嶋と唱へとも小佐原組津宮篠原大倉岩崎の新田石余を
 一耕地入會とありて是を新島料と唱ふと云

。あうん堂 八筋川ふあり十一面觀世音を安置を例年七月十
 八日相撲あり 御堂惣赤ぬりある也

。藥師如來 大嶋ふありさる當島を開草をこる黒田玄蕃亮則
 利守本尊也といひ傳ふ諺ふ云新嶋起立の頃黒田則利と常
 洲行方郡大臺六丁堀内村の城主小貫大藏の領主佐竹氏の
 家老と常陸下総の堀目争論ふ及び互ふ船中あてアカトリを
 以て泥を打合之斗也又水をアカといふハ梵語あり

其日ハ双方相引ふあり翌日互ふ軍船を催し牛堀前ふおいて
 合戦を然る小貫ハ飛道具を以て打立るとハ黒田勢大いふ



敗北してきてふ急難のがまかしく覺りせば黒田への薬師如
 來を一信の祈念せしふ不思議ある哉暴風頻ふ吹起り荒波敵
 船を顛倒を其隙に黒田勢ハ霞が浦めりぎの鼻まで逃のび難
 なく引取らるるとりや是をせむるお合戦といふ後ハ公の御沙汰に任すと也
 加藤洲十二の橋ハ川の両邊に民家ありて家おとの通行橋也
 兩岸の橋杭有て中み板を架をてもとより十二あるが時として十三ふ成夏に
 せば又一橋闕るたと極めて出來るとあり
 子育觀世音加藤洲長泉院境内にありおの寺より御夢相みて
 小兒五疳驚風の藥を出をせふかとうず薬といふ
 牛堀 霞が浦入口あり霞が浦へ至て渡り難き海をせば此所ふ
 滞船して風をまつ故に出入の船多く此河岸に集りま鹿嶋
 へ至るに利根川より横利根に入り北利根川を経て浪逆の海
 にいづる鹿島道記に仙臺霞の浦志田の浮嶋ふといふとこ

る船のうちより見こさるま右のりこさるうみ筑波山こ
 のも彼面の峯も見えさり漕行船の追手ふれば見るがうちふ
 むうふ山々も跡ふありて々ふやふるさ詩ハ汲水疑山動揚帆
 覽岸行といふもされがら目前の景氣ふおひやらるる海
 濱に海人の家居ありて前の杭に網をうけり磯邊に小舟引
 きて物さむる住居のさほがふよく繪ふも似たりなりと船
 むさふつらにえつきて見みくこれも跡ふ成ぬ昼つうふ風を
 ましむらひてうちくもり夕立一とやり志てふえうに船のう
 ちさるる岸に船をよせて風のうらるをまちくるお雨志ど
 ろふ降ささうされハ笛引おふほど心もいとむづう一半時
 斗して雨風やま名残の雲も晴とさうて空も見るがうちおき
 よらう小日影の見えたるお岸の芦の葉ふかくせる露をむら
 くと風の吹みさびささま涼いさいやまさりぬ爰に船うけたる

ほしめてとり子やう此ものとりむらき人々ふもさし免とづ
うらもまたしめて時うつり侍ればやうく日もかこふれぬさ
らばとて漕出し行ふ潮來のむらむふあさりて香取明神入海
をへびて神々しく志ありあむさる木の間に玉垣のを見
え侍るいとさふとくをがまれさせ給ふ海よりうちいる塩と
水とのみかとなきバ浪たうく船志づららばされども所の
もれども引船多く出して細波あて先立ち引れきバ日高くか
もふ岸ふ船着さり潮う返てハ暮て此磯ふいつくべうりたり
と船のうち此者共もいひあへり々きども今朝より此追手の
風ふさそハれ漕とも覺えげそり行くる也急申刻さくる不
どうやとお不也船よりあがりておもふうさふ入侍りたれば
あるトの出あひでもてれいふ斗あし此宿のあるトハこれ
みちかまふうたもれあればとさきて心ふうしりあり参議源宗

堯卿水御使たまりりくごものふど送り給ふ此君も二日三日
のうち常陸に國ふ下りふべき沙汰あり爰もかの領するふ
所あれば何くそと驛路の人馬おろく出して旅の舎りれこや
まで御らうゆふうけ武藏野より先立ちいしをらせ給ふとぞ
みうちこれ人々こきくそれさごせり云
同安永道の記ふ香取の浦ふ船よするも浪ハ志づらあれど風
むらいて船おそく日も暮あんと船子どもいつもバやうび遠
く見ゆる森の木立そのうごときこゆれを遙ふをがとぬらづ
きはく浦あまの立もさうらねむ

音ふのを聞てぞこころ夏衣かどりの浦ふよ次る夕あま
銚子といふ湊より入る船とも追手あれば此浦ふ着るると
て帆柱のとなてはあがる船あま見ゆ是ふ人香取の浦と
いふ

帆柱ぞみをはきしるる大船のかとりの浦の見るめから祢
どかくてゆるく川岸の田面を越て霞の浦見ゆるもえたるき
えら浪の高く打よきる浦のあがめ折うら夕附日かどやさあ
ひて船中第一に佳景あり

入日影色とる雲ふ立そゆる霞れうらの水れえら浪

まじ信田の浮嶋みどりまじく浦のあれさふ木ごち一まぢ
引こさるやうふ見ゆるいふもえあらび

浦の名れうすとも夏ふともとや見るめせどらぬ信田れ

浮嶋筑波山遠うら祢ども雲立こめて見えび日くれぬれが河

岸ふ虫のみごも飛あまこ見ゆるもきくしれもれうら夜いこ

く更あむ事ふ心おちぬ祢バ歌よまびいそぎい潮來の河岸

ふ船をつらぬ云 歌あめぬこあまきど二首づつを

潮來 鹿嶋志云鹿嶋よりハ西二里行方郡ふて濠肆有ていと繁

昌ふる地あり潮來の字もとい板來と書くるを西山の君鹿嶋

ふ潮宮ありて常陸の方言ふ潮をいことい興あることい

おぼしてかく書改られりとう和名抄ふ行方郡板來風土記

ふ從是往南十里板來村近臨海濱安置驛家此謂板來之驛云ま

と津見原天皇の御世建借間命せしと凶賊どもを撃亡さるし

所ふ種属一時焚滅此時痛殺所言今謂伊多久之郷云

潮來圖志云常陸ある潮來の里ハ東都五町街ふるらひ一廓ふ

り朝夕の出船入ふ祢落込客のせんせいに花の何いた雪のゆ

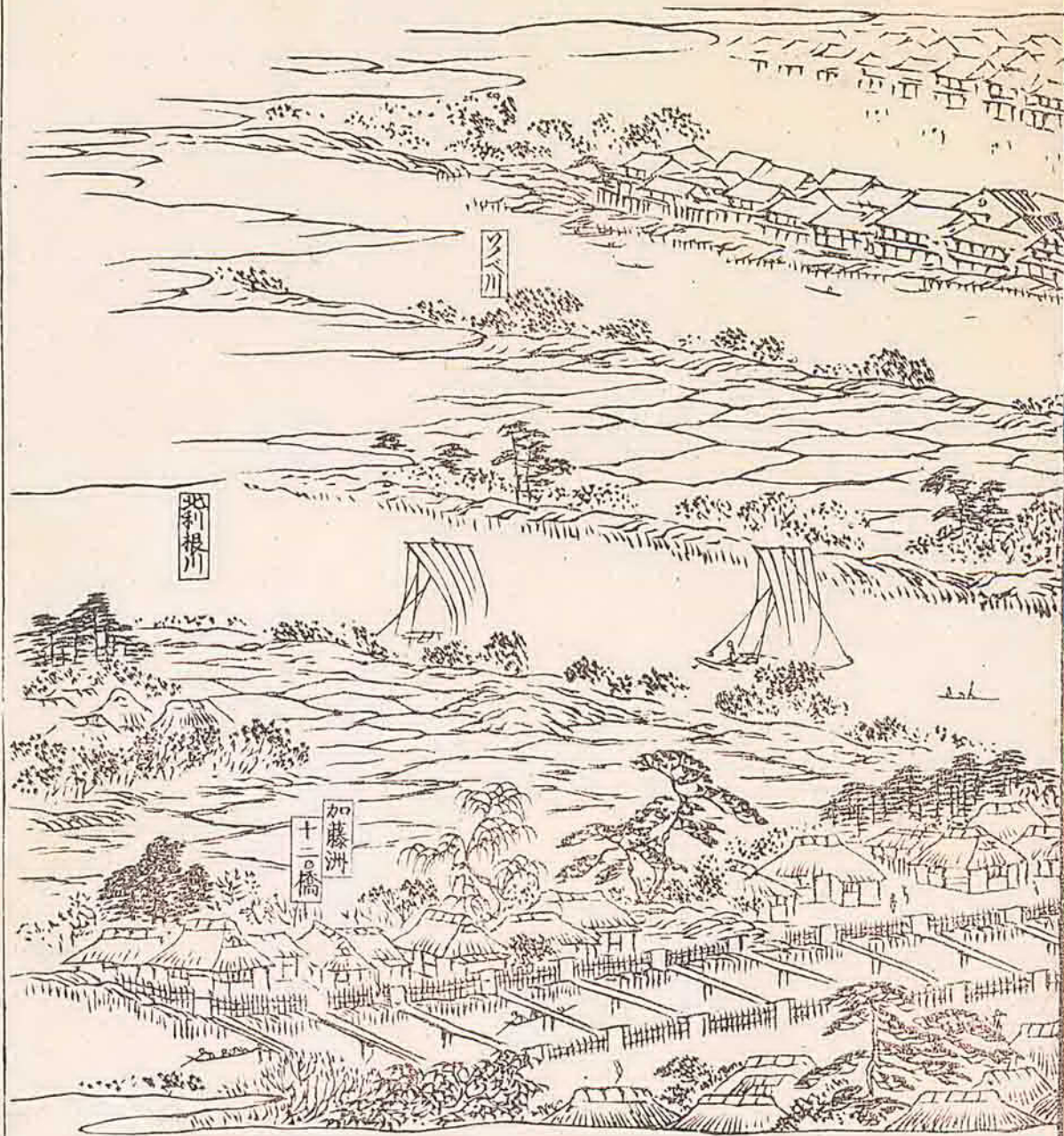
ふ登十六嶋々いいふもさらあり香取かしは息栖てうし浦

々まで一まうふうみ富士筑波の両峯ハ西南ふつらあり

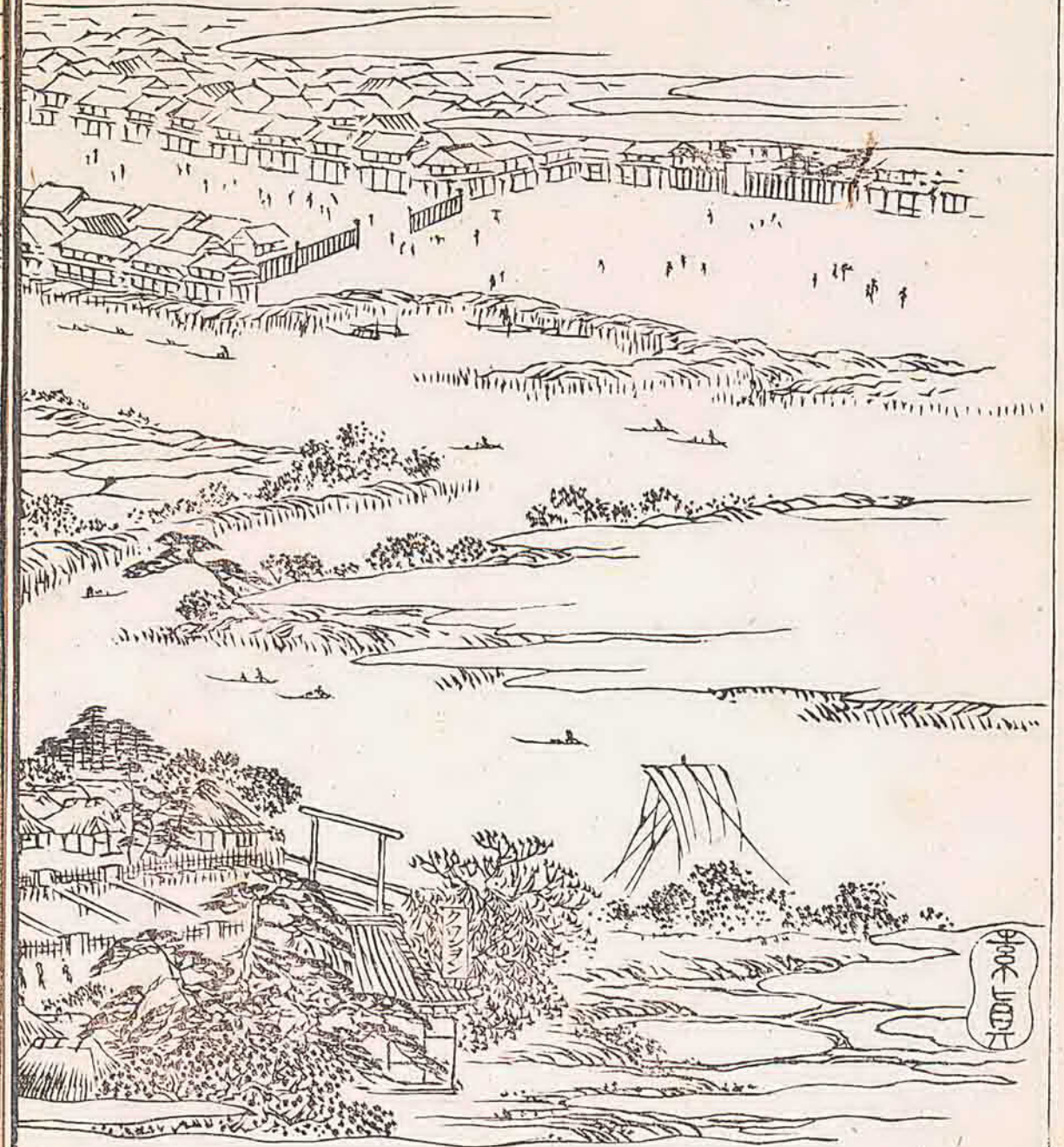
数十里てうまうの影境あり近き頃まて銚子口より親船むき

もれくび入津せし處也諸侯の藏屋敷建つゞき一が淵瀬うこ

りて船もいらは唯仙臺河岸のそ存さま西の入口ふ潮浪里



いたこ
潮来の
の
圖



SHOEN JINCHU

や呼小坂ありうーすのさー引める故ふ在ハ名つけーかーん爰
々々遊女町す々十餘町其間を淺間下々々いや高き並木あり
いふこのをらく松とて沖乘船の目あての森とて春ハ梅藤の
名木四季にあが光いとよろー此處より霞がら信田の浮嶋
手ふゆる如ー

海雲山長勝禪寺 二町目より入る馬場の両りの松の並木山門
ふ十六羅漢を安置を佛殿ハ南向十間四面 右大將殿の建立
あり堂のうささらふ卧龍松前ふ文治梅あり鐘名ふ

常陸國海雲山長勝禪寺鐘名有序

寺始於文治元年右大將殿時所立也迨今元徳庚午百二十余
載乃爲鎌倉殿御願所大檀度道曉禪門以古鐘未宏与貴眷等
共施賤新而大之住持妙節長老請於圓覺清拙叟爲之銘曰
維古蘭若 長勝厥名 寸筵微撞 今畧未宏 爰命鳥氏

鎔範速成 鏗々旬々 殷雷吼鯨 音聞佛事 開聲啓育

大哉圓通 十虛廓清 霜天月曉 落景初更 眞機普發

衆夢齊驚 深禪偃仰 苦趣休停 容船夜泊 常陸蘇城

上延睿箕 下息戈兵 檀門茂盛 梵刹堅貞 海雲日橫

青山崢嶸 人天號令 相道通亨 元徳庚午十月一日書

大工甲斐權守 助光

住持傳法沙門 妙節

大施主下總五郎禪門道曉

大檀那相模禪定門 崇鑑

斯る一より此鐘とごりふ撞事をゆるさび又時の鐘ハ本坊
此入口ふあり

小里姫の塚 同大衆院淡島明神の地内ふあり小里姫ハ島崎左

衛門尉殿此姫君あり今ふ小里とつふ古跡の地名あり

潮來竹枝詞

詩佛老人

思似月明復水清
隨郎行處逐郎行
談從十二橋頭望
何水何橋無月明

泊碧欄舍

鵬齋老人

家々面水領秋色
明月湧時流更輝
漁唱一聲何處子
潮來風起竹枝辭

あまのつりてとらめやあむ寐さむをえ山ふ千鳥のささき
あまのこゝろ

鶴鶴や潮來をくして岩つゝこ

蓼太

南郭文集の潮來詞二十首并序五山堂詩話其外詩歌發句と云
諸書に散見する處擧て數へがまゝ一畧之

松屋外集の二神社を古曾とつゝ條の伊太祈曾ハ和名抄に紀伊
國名草郡伊太祈曾神あり且來郷の前神戶須佐神戶多とふ
並びあり且來をイタコと訓むハアシタコのアシ比約イなま
ばあり常陸鹿島に潮宮とつゝる小祠あり又行方郡板來郷を

今の潮來と書たりこの朝來の誤あらむと門人北條時鄰が鹿
島志にいへり續日本記四の卷に紀伊國名草郡且來郷と有り

名物 花あや免 川名び 鯉 むら 鯉 鳩

扇島 さいらんふ聲うけらるゝ田植のぬ 五達

潮來曲の唄

柳よやあまぎよ直あるをぬぎいやふ風ふもあびうんせ
さこの三夜の三日月さほよ宵ふちらりと見こむうり
こしが心か竹ふもわらわつて見せこやぶのむねを
さぬよかほふ神あもあらば何をせたまへや今一度
いたこ出づぬの十二のそゝを行つもどろつ志あん橋
戀ふこづれてあゝせとよりもあまぬ螢が身をこぐけ
いつこ出島のまことの中ふや免咲とらつぬ志あま
戀のちとぶと草あひうも福をみとるよふ猫ほりや
數あれども余はもくくぬ

潮來の遊女何某ある時の吟

おもふ事積ぢゆくづす炭火の如 俳家奇人談
露もやとろく寐らぬ舟の中 霞水

潮來詞二十首并序南郭文集三編一 二才

甲子春遊鹿島舟下刀禰行聽欸乃聲調楚哀頗有情致問之則云潮來所歌潮來常南地名也既自鹿島歸舟登其地就見臨江數百家多倡妓俗雜日夜相聚遊戲蓋東控海西通都率多水漕之利魚監之饒商旅所湊亦江東一都會也其謠大類異歌當讀樂

府遺篇吳聲歌曲及西曲諸樂想見六朝謠俗之態其聲雖不知以今視之士風詞情蓋可知也又感劉島錫聽竹枝之音乃雜擬江南諸樂符此作此詞于首因記舟行興寄聊自
玩耳

不見東流水歸舟西曲流潮來風且逆有時不自由 可憐洲裏鳥兩々浮江水日見不識名
指顧問客子 門前倚獨樹鬱々掩江涯為是苦心多春來不著花

雲氣南馳曉。紅只水

一雨洗晴色不須遠

駕毛々々如雲穩生長江

萬里風

曉笛乃稱川水雲老人球



園邊川 潮來の前北川をいふ北利根川の分流にて末に延方よ
り浪逆の浦に落つ此川の名はむろいこの大和屋太兵衛
抱の棹女登の朝夕びん水を流しくる故そのべ川と云とある
ふまづ川 北利根川の末にあり是より浪逆浦へつづ

髭石どの芦戦ざくり鯨川

貞翁

浪逆海 鹿嶋志云大船津の前より行方のめぐりをあけて云り
萬葉集に 常陸あるなさく北海の玉藻をひけむさえされ
あどく絶せん仙覺抄に常陸の鹿嶋の崎と下總の海上とのあ
ひひより遠く入るる海あり末に二流あり風土記にふたせを
流海とかけり今の人々の内の海とある申すその海一流は北の
うら鹿嶋郡南のうら行方郡との中へ入るり一流は北のうら
行方郡と下總國の堺をへく信田郡茨城郡までつれり然るに
うら内の海塩はまづる時あり波ことふさうのるるあるれは

浪のさうのぼる義ふりて浪逆海といふべきありきり云風
土記に香嶋郡の西流海ま行方郡東南に流海云
安永鹿嶋道の記に今日もまづ船路をくまづ漕出とば潮昨日
あは似む廣き堀江の芦間をくるともとをく一真ありなりい
つら岸を遙く漕出れば入海とやらんといふと蒼海に記
りあるれむらあるとこれとの山も磯にもと遠くもどるあり
浪風あざとくりていと静るれば取楫ゆるく心也とまゝ十あ
まり北嶋ぐあるかあるとも及ぐとく見也息栖はたるうら沖
のうらさき出るといふもさらあり
立花の松の洲さたふそれとまつい花でもあらく見ゆる
神垣の御社も昨日詣むとの武藏の國府ふてはを北あら
まゝありし頃此頃の風ふて船路追手あらば打やまぬ今日ら
よくをきて船路も静るをば船よせむと船子どもいへと兼

てそれまうけあら祢バにたうれとりまうあひの出がごとく行
過ぬるどあく大船津小差ぬ此き一か十八丁むり放せて
海中小鳥居ぞてりといふ今建曆の時ありとて見えば云
大船津 鹿嶋の神北一の鳥居海中あたてり鹿嶋日記ふ舟津と
いふを大安寺に私賊帳ふ津國西成郡船津とみえ平家物語有
王嶋くどりれ段ふ彼嶋へとる船津ともありて船津く野ふ
いふ名ありりり云まをも神の津ふればむういハ津の宮とい
ひいよー風土記ふ見ゆ是より神宮へ十八丁

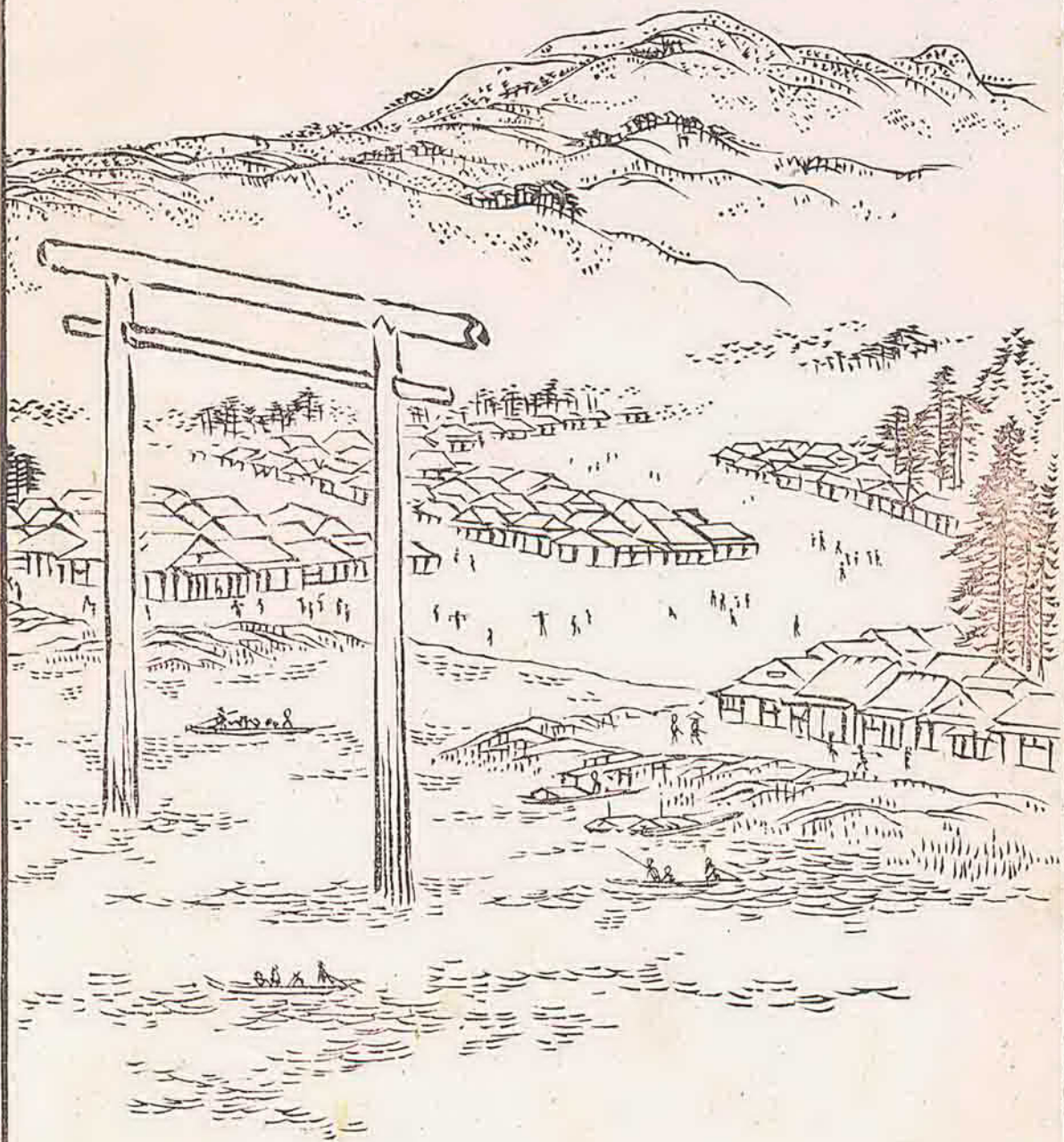
まご大船戸と見つら東國戦記鹿島合戦の條ふ文畧江戸崎
の城主土岐伊豫守五千余騎を引率一夫二船二百艘ふ打乗り順
風小帆をあげか一をさして押寄るこの事一聞へけ
せむか一塚原の城ふ自官友治大ふあどろき合戦の手分を定
めんともま塚原の城ふ塚原若校を大將として五百余騎林
の城ふ林左京大夫を大將として五百余騎神領ふハ大宮司
を大將として五百余騎鹿嶋の宮の前ふおける土岐
伊豫守大船戸ふ船を漕寄て敵の様子を聞せける云云
鹿嶋の故城 鹿島志ふ鹿島三郎政轉の子六郎宗轉始て築處也

宗轉ハ讚州屋嶋合戦の時義經の先手ふて討死其子時轉城
主とふれり時轉より十二代の孫治時天正年中佐竹氏のとめ
ふ殺されて城廢まかく鹿嶋氏滅亡一ふより國分大膳次男左
衛門胤光 千葉常胤の支孫 を立て惣大行事とせり是古一への
惣追補使の家あり今猶存を委曲ふハ常陸國誌源平盛衰記東
鑑鹿嶋氏世系等あり鹿嶋城合戦のことハ鹿嶋治乱記東國戦
記ふどふとも今ふ城山とて其跡あり慶安五年までハから堀
ふどあまご残て有一を泰平の御世ふ用あきこととて大宮
司則廣うれう堀ふど埋らまき 新坂新町ふと云ハ 又大船津
より北ふ當りて峯あり里人是を大掾べことといひて常陸大掾
國香の城跡ありといへり 北條九代記北條相模守義ふ從て眞
義經記評判義經都落の条ふ片岡こそ常陸國鹿島行方といふ
荒磯ふをせいーるものふを信太の三郎浮島の有る時ふ

川北

十二

鹿嶋故城



鹿嶋神宮
一の鳥居

大船津
の圖

大船津



素真

常小也きて遊びるる小源平の乱出来候り葦の葉を舟ありとも異朝も渡りなむととんとれる

鹿嶋大神宮 常陸國鹿嶋郡鹿嶋郷正殿武甕槌神相殿神右ハ經

津主命左々天兒屋根命を祭り神代の昔より六の所小鎮座

大神あていともくふる死事あり風土記小淡海大津朝天皇

初遣使人造神之宮自爾已來修理不絶云とあるせり猶委

き夏ら鹿嶋志小詳ふをハ畧以

萬葉集小

霰降鹿嶋比神を祈は皇軍小我ハき小一を

攝社末社をべて八十末社あり畧之

祭禮ハ年中の例祭大神事百三十三度小神事七百餘度その内

常陸帶の祭四月十日祭頭二月十五日御田植祭五月御軍祭十月御

船祭七月十日新嘗祭八月初相撲九月九日夜

名所 要石 地上小出する所二尺許石頭小夫木集小光俊たづ

衾うねらふとつる哉千早振と山のおくれ石のみまとを

御笠山 神宮のめぐりの山をいふ松杉の御手洗川山二丁むり

高開の原 東一里斗あり末無川 同所 碁石濱 同所 鹿島浦 東大角折

濱 三里斗 壺山 神の池 南三里斗 浪逆海 大舟津

御物忌 身潔齋して神小仕へ奉る此衾あり物忌ハ神官の内よ

其職と

大宮司 神宮寺の夏鹿嶋志小詳あり

神寶 古文書等畧也

七不思儀 要石 御手洗の水 末無川 御藤

海の音 根あがて松 松比箸

七井戸 深井 成井 華柄井 清水井 保太井

寸府井 波左間井

○名物 洲濱の菓子 俚俗デニユウといふ

彌勒謡 土俗のあらひ小物の祝ふとあるをり又ハ祈事まゝ日

あどまべて時節ふはあつゝ老婆等おろく集り彌勒謡とて各

声をあげて歌うこひ大討をうらて踊り手を振つゝ踊る貌

いと可咲く中昔の風とえさり其謡いそくよのあうりま

んどま川だいぞろくのふ糸がついさともへふらいせとか

まが中鹿嶋の御社やしろありがさやいさをおもりりこ

か社檀打かやしろありがさやいさをおもりりこ

はめか免をがめこざゆかとり志トかおやしろおとにき

くもたふとやひとさびのやねりまうしてか糸のさかまか

うより金ねさごととおふひござぬよねのさがあまううよなふ

ことも成就一ぬひさちかまのうみぐゝ又雲萍雜誌おも

鹿嶋踊の謡見ゆ此外くさぐの謡あり

經石 御笠山のうち埋さる所ありて五六間許のあひど小石

小經文を書さるかまドリをり親鸞上人比筆也といひ傳されど

總常日記 臣小近き頃が友持谷望之がさうふまうてーをり

有り出さる銅牌一枚を見せバ秀尊といへる法師の書て埋め

たるゆて親鸞上人のふたあゝぬあとあるー

表

鹿嶋太神宮寺 奉納妙法蓮華經二字一石書寫 一百三十七部

長九寸一分 幅上三寸三分 下二寸六分強 厚一分弱

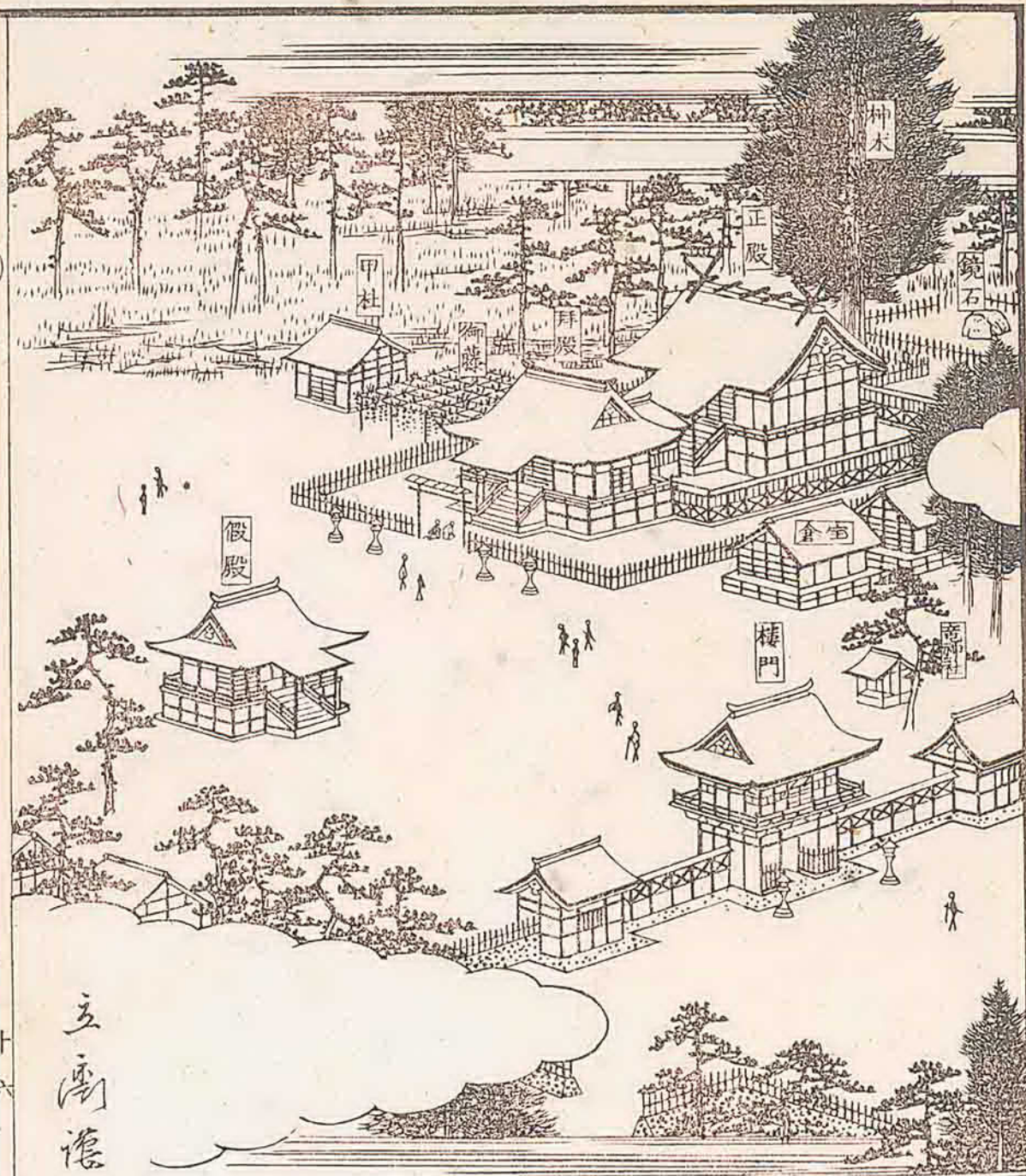
嘉吉三年庚申二月二十日大願主秀尊白敬

裏

去菟篁 醫山 道永 次郎三郎 慈父祐尊 良貞 德賢 慈母有阿弥 道祐 妙意

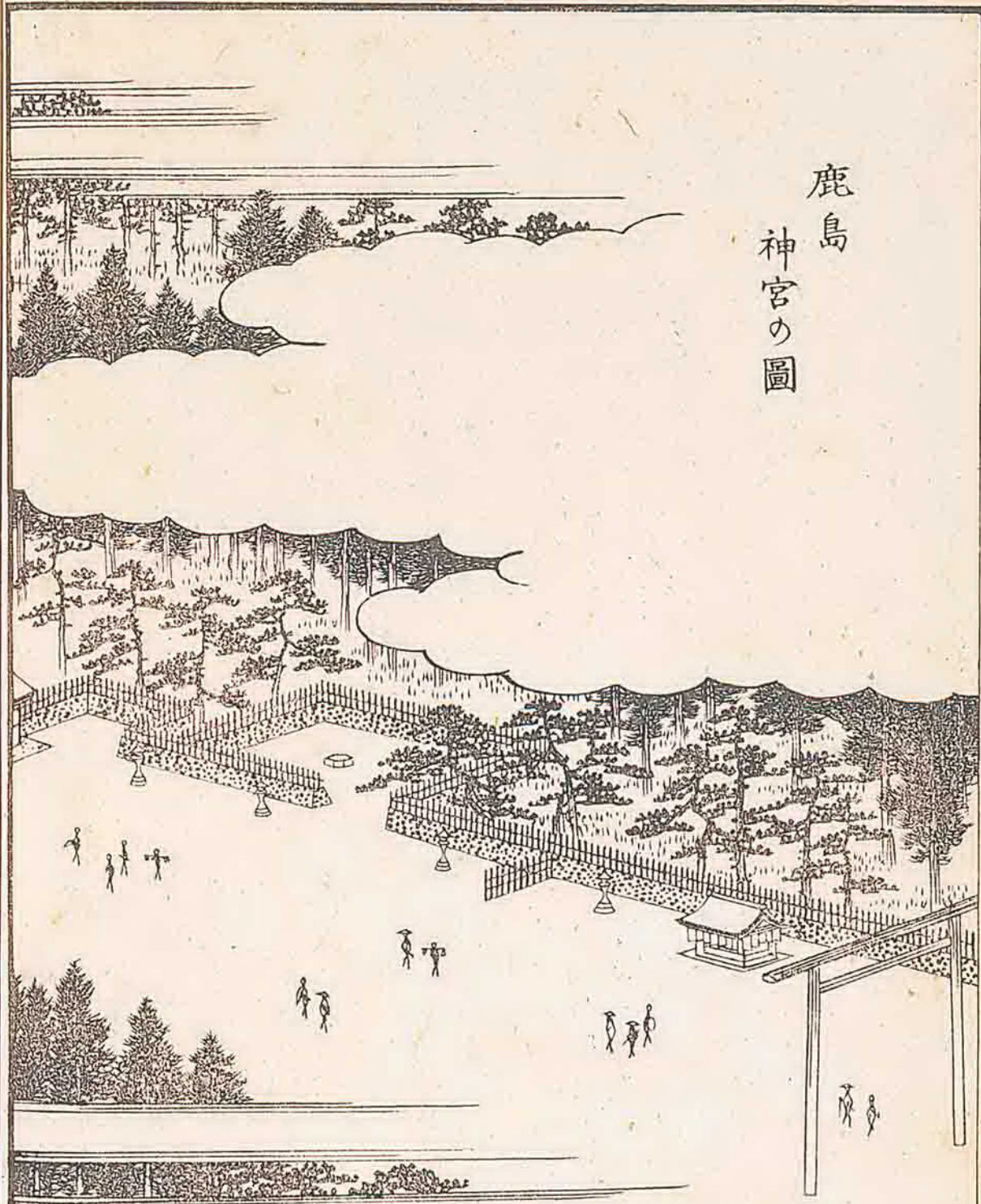
嘉吉後花園亭 年号推文化十二年三百七十三年

今もやろふをさ免あり云



五所徳宮

鹿島
神宮の圖



享保道の記仙臺吉それより輿のりてゆく浪打際ぎまで津大
宮司同神司東主膳出あひてあり此こに死にふ立て主膳ハあふひ
ま所の古跡せきふどかよりきうに威徳院觀照院寶照院地福院ふ
どりふ真言宗の寺あり大船津の漆家數千斗ありとりふ此里
をえぬきて山のかさふ石ふてりけさる小橋こはしよりこれ鹿嶋明
神の御神領地あり古のところを藤原郷ととりふ大織冠鎌足
公此御誕生の地あるもへうくつへり則社すなはちもほりとりふ以て
りぶうり大織冠ハ大和國高市郡の人と元亨釋書ふ見えさ
り此遠國えんこくあて生れ給ひいと云こと成きうば詞林採葉抄しんりんさいえつしょうふ鹿
嶋明神かしまかみふ参詣さんぎありふとりふ事見へりそれさへいちある
からびさやうの事よりいひ出して後人の伝へたるふや鎌
足公かみ此もあたまたふふ鎌も此社このやしろふあるよをかたる猶信なほのぶトが
た一近衛殿御家ちかえのどのごみけふはさよりほるよを聞きくをまか鎌倉かまくらふ

かの鎌を埋うめとふふとりふ説せつもあり何なにもこれと數あるべき
も此ともおぼへばいびきり本説ほんせつありむ瑞甕山根本禪寺とい
ふ寺あり門の額ハ東海禪窟とうかいぜんくつとあり筆ふでハ若わからざれどもふるく
ゆへりて見ゆ本尊ほんぞんハ藥師如來推古天皇すいこてんおうの勅筆ちくふでふて佛殿ぶつでんふ
祈禱きととあそびされふる額がくあり何なにまぐどり此御甕ごみとて齋の家さいのいえ
ふ今いまふ傳甕でんざうありとりふ藤原光俊ふじわらひみつとの鹿島かしまを見れば玉たまざれば小
ろめ斗とをまこのころきるとよとありり此ろめの事とぞ云
まよ安永道の記あんえいどのき徹山てつさんふむり此道このみちを祖父君そふいみぎみのころらせあふ
道の記みちのきふく見みられむを彼主膳かみ宿しゆくふ至りて浴ゆを清きよめ
衣服いふくふどとりやぐのへてまうでぬまぐ跡あとの宮みやふまいる夫つまよ
りして御齋ごさいふまいる女おんな四五人ごに五人あふびぬさる中なかふおとふひき
る女おんな立た出て御酒ごしゆをくめまよ御齋ごさいよりをくさる和歌わが二ふたくさ
もてく主膳しゆぜんふとらふ居いて通とほせよと聞きゆれども神廬かみのお

それともあまのつとみふゆらへせん事のたぐりありあらく帰國
此後ふこそ申へきよしあてまうてぬ御齋の歌二くさ有り
わあみ守護のところみちれくの太守鹿嶋の社へ
立より給ふかゝこさふ神慮此程をおしえうら
い祝の余りふ言の葉をたぐりあてまつる

鹿嶋祭主御齋光子

うれしやと神もあもつむ今日いまこまれある人のあふく
まごとき

又寄國祝をよみ侍る

かゝこゝれ猶ゆくさぬもあびくらゝおさする國に御代の
民くさ

と何りなれば目を經て返してとて申遣はる

鹿嶋の御社に詣る日御齋光子此もとよりう

と一やと神もおもつん今日いまこまれある人の

あふくまごときをかいはけて送らるれえ

外ふまご何うおもはんまきふきていのるまごときを神う

けあへ

寄國祝とりし事をよみて送らるる返してとて

代々りけて治國此民くさもこと木の露も猶あびくらゝ

かくて十町あまりもあつむ木立はぐく所を行て鹿嶋の御本

社に参詣をきくふまさる森の志をりたるが中ふじきて杉

木高さきく何となく神さびにさかとうときいをむうさあ

一樓門ふの大宮司何かをはしめ神主あまこ出迎てあふい

を拜殿歌仙の間ふどりのふきらめれこころぎふさうりともお

がゆ石の間より内隙ふ入あおがみ奉り公ことくこれ祓きお

とまればみてくらいつくせみきを進るふどいつくさく海

あづまりて思ふくほち一是より七八丁歩より行て奥の宮ふ
参りまうでけく爰みて又旅粧ひして御手洗要石など行て見
る又もとの道立ウへりて御本社残るうとなくながみぬ敷多
比靈寶をも拜きて後宮めぐりまればふるに鎧あり御本社の
内ふ神木の杉まことふまぎぬくいくとせう經くるものぞ
木高くつとくふの主膳こまやうふかたる二の鳥居を出
てあし百よせて猿田といふ驛のうとふ行日もたけて午のさ
がりあれば高天原三笠山ふどつあへ見むして汲上ふ昼餉一
て夜いとう更て夏海ふ差ぬ云

息洲神社

息洲村の海邊ふあり住吉三神底筒男中筒男表筒男
命を祭り鹿嶋日記ふ處のさは駿河のくふれ三輪の社頭ふ
似たりといえり總常日記ふ汀三十間をうりおぬきて海中ふ
鳥居とてり鳥居のきは二三間はれきて神代より此瓶といふ

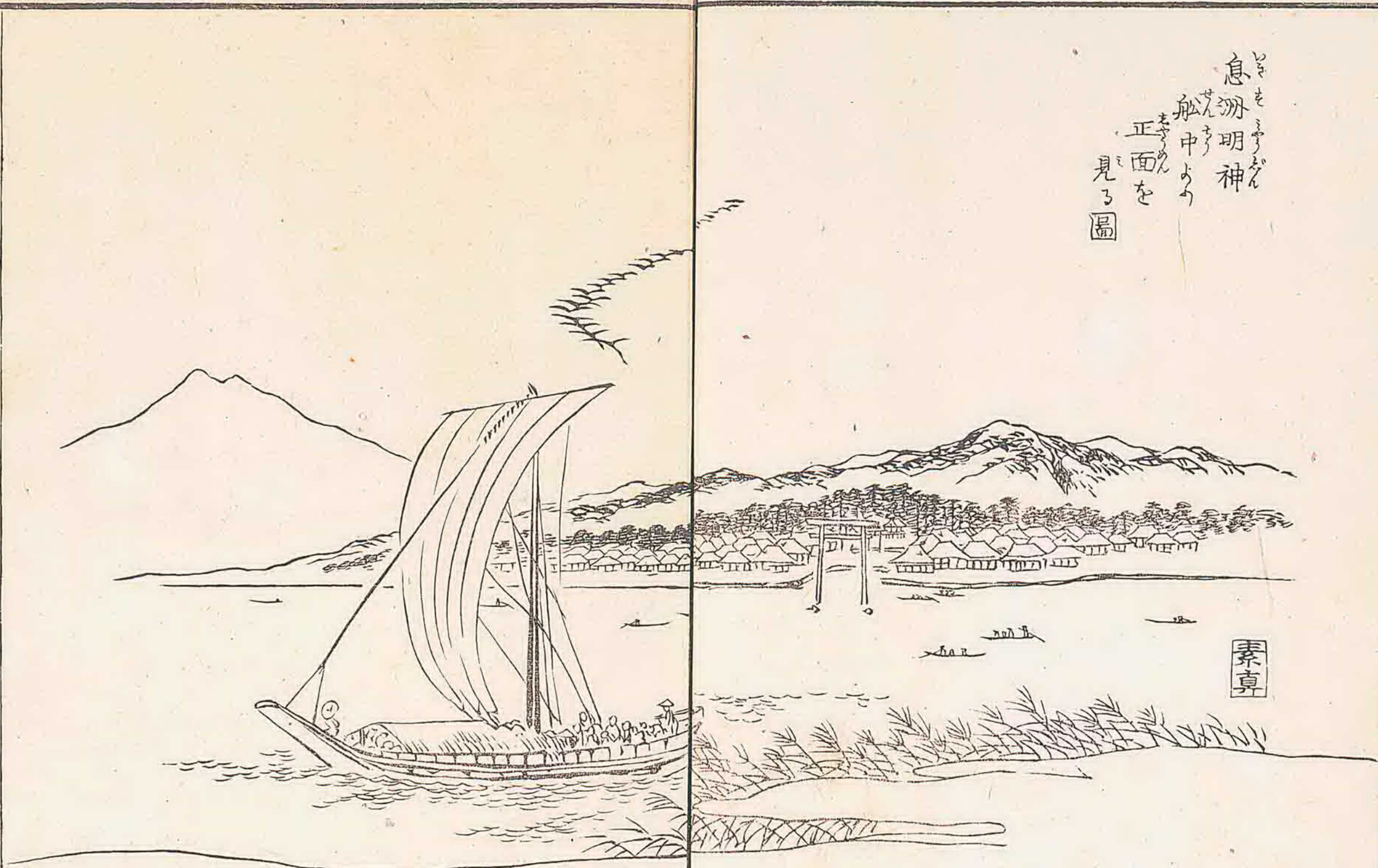
大小ふつあり大きぬるはとくり六尺むくりちひさきハ三
尺むくりも有ぬらんをりも潮干たる時よて船よりれぞき
見ふ水底一丈むくりふいと何ぎやうふ見え砂地よりうり
ちなうををあらえして見ゆ薄黒きに黄色をそつててりひら
りたりを産ての氷ハ潮をくくして此瓶のうへれる所をぞ
さらふ潮のけあくあぢをい何とくあぬ云

諸國里人談ふ息柵明神のいそちうに海中ふ女瓶男瓶とてふ

と川の奇石あり男瓶ハ経一丈あまりふして銚子のかち也
其口とおがしき所ハ溝あり中ハ控のごとく窪て鍬の形あり
女瓶ハ口より五六尺むくり土罫ふ似たり土俗曰これハ神代
の銚子土罫也と此石満潮ふハ二三尺沈めり干浮ふハ水上ふ
あつるその銚子の中ハ素水ふして潮の味ひふ一是を忍塩
井の水といえり人皇十五代若櫻宮天皇御宇三癸未歳二月鎮

息^い羽^は明^み神^{かみ}
 船^{せん}中^{ちゆう}の^のり
 正^{せい}面^{めん}を
 見^みる
 圖

素^す真^ま



座の額あり云きて此瓶ハ水中ふたてる鳥居の左右ふありて
常ふ水底ふ沈たり干深ハ水上ハ出ル空の曇りたる時ハ見こ
うらび晴天をりハふくくもるあり息洲とつる名ハ沖洲の
義うまの浮洲の義也

神の池 鹿嶋の神の池あり鹿嶋志ふ三里許南ふありいと廣大
ある池みてふくハ安是湖といへる是あり風土記ハ鹿嶋郡
若松浦即常陸下總二國之堺安是湖之所有若松の浦ハ此邊
今深芝村と云て
五六里の間若松あまとおひあがり各其まぐふおもむき有
ていとおもふろき小松原なれば若松の浦ハ名もくふん
瑞驗記ハ寛永十八年大飢饉ふ此池より細き鳥繩のごとく長
四五柔ばかりの蕪汀ハ日夜寄來る不ど近邊ハいふ及むむ
遠方他國の物まで聞傳へ是を取飯のうてふなハ或ハ汁ふ煮
て食の代ふ用ひ命を續々も大神の御惠ありと諸人尊敬
奉りぬ云あま按ふ古き池ハ種々此もの有と見えて閑窓瑣談ハ

結駝録を引て元文二丁巳年播州姫路の一邑ハ池あり廣さ數
百歩ありハ或人の小兒其池ハ水浴て溺れ死しけむハ水を
涸して田とせんとして一村の人々合力て水を酌乾せし池の
底ハ白き綿あり土人こきを取て着るハ草綿ふ等しけむハ糸
ふ緑せ織木綿とせむふ結好ある着用とせむハ尤多く有ハ故
村中ふ用ひ餘りて他村ハ賣出しけるハ色白く上品なむハ他
郷の人ハ價を惜まば争ひ求ける也ハ一村大ハハ利を得て徳
はきつりとせむ

新野橋 神の池のるどりをきぐて輕野といふ風土記ハ萬葉集ハ
鹿嶋郡新野橋別大伴郷とことかきハなる長歌ハ輕野より舟
出して下總海上をさして渡るハを讀てさむハそれ邊りハ
ありハ橋ありけん云今ハの

童子女松原 官本水雲云風土記ハ輕野今神の池也以南童子女

松原昔一神の男神の少女と云るがありて少女を海上安是の少女といひ男を那賀寒田の郎子ともいひ一が何れも美麗なる生れつきふて互ふ思ひ逢て遂ふ契りを結び一が人目を愧て二樹の松ふ化せし事をのん是今の常陸原北地ふ河を鹿嶋の攝社とて古く祭で來せる手子后明神ハ神の少女を祭り一あるべし古ハ常陸原の地下總海上郡ふ屬せし由も風土記ふ見ゆも此乙女をも海上といひ一あり安是の地名も風土記ふ出たり寒田ハ今三田といふ此邊皆いふ一那阿郡の地ふて神龜以前ふ鹿嶋郡といふあり也

手子崎明神 東下の羽崎村ふあり鹿嶋志ふ旧記ふハ神遊社ともいへるよ一とえてすハ大神の御女の神也といひ傳へたり按ふ上つ代香嶋郡童女松原ふ則羽崎神の郎子神の嬢子と云ありてかときふむつびとたりなるが逐ふ松樹と化して奈美松

古津松といへる故事風土記ふ見ゆされハ昔の童女を祭せる社ふハあらざるう嬢子を手子といふハ女子を愛しといへる名ふて万葉ふ葛飾の真間ハ手兒まと埴科の石井の手兒まことさとしりの手兒ふいゆきあひふとよめ手兒もあるとさて手子崎ハ此とこり海の出崎ふれを手兒の住ると由もてさといへるある人云

羽崎 東下の羽崎村あり此邊をてて羽崎舎利高野別所海老臺本郷アラクオの七箇村を合せて東下といふさて此ところハ鹿嶋の浦より浅きいと廣き砂山の木草もあく赤々と名ふる砂地を経てあつふ至るの光俊朝臣の家集ふ康元元年十一月鹿嶋の社ふまうて彼嶋のさきふはうりて見ゆ我國北東のそてふあ人有るうの社より崎まてハ七里とぞ申めると云り一ハ此の羽崎のことふてぞいふ也

○是より川南

側高明神 香取郡大倉村山の頂（いんぎ）あり古松（こまつ）繁りて神々（かみかみ）き森

あり香取第一の摂社（せつしゃ）ありとぞ祭神（さいじん）ハ古（ふる）より秘（ひ）て云（い）ざり

いと多（おほ）ん鹿嶋日記（かしまにじ）ハ側高明神（かみかみ）といふあり年（とし）ごと小鬚撫（ひげなで）の祭

といふことありその酒宴（しゅえん）の席（せき）を設（たて）て賢酒（けんしゅ）をくみかえしも

口（くち）れあさりの鬚（ひげ）あぞ一者（ひと）あををさひて三杯（さんぱい）のまきもならぬ

ありといへり云

粟飯原氏城跡 分郷村（ぶんきやうむら）ふあり今城山（いまじやうやま）といふ土手堀（どてまほり）の跡（あと）ま

ある石櫃（せきびつ）ふどあり（小見川より西南）の城（しろ）も小見川（こみがわ）とと多

一みや常總軍記（とこしやうそうぐんぎ）ハ小見川の城（しろ）ハ粟飯原（あひのむら）左衛門（ざゑもん）小見川（こみがわ）越前

守と見えたり

木内大明神 木内村（きのうちむら）ふあり諸國圭齋（しよこくきしやう）録下總國（げすうこく）の部（ぶ）ハ七石木内

大明神 香取郡木内郷（かみうち）木内伯耆（きのうち）同五石熊野（くまの）権現（けんげん）香取郡府馬村

宇井左門（うゐさだもん）あり見えたり

小見川 香取郡あり内田（うちのち）彦（ひこ）の陳營（ちんえい）あり諸州採藥（しよしゆさいやく）記云小見川内

田何某領内（たになんりやううち）ハ四季咲（しきさき）の櫻（さくら）ニ所（ところ）あり一本（いっぽん）ハ八重（やえ）ふて一本（いっぽん）ハ

一重（ひとえ）ありと見也（みても）此（こゝ）さくら（さくら）から（から）朽（く）揃（そろ）りて今（いま）ハあり天正十八庚寅年

領地拜領下總國香取郡小見川（りやうちばいりやうげすうこくかみかみ）監物家次（かんとくけあじ）平

東源軍鑑（とうげんぐんかん）三藤澤合戦（さんとうさわがっせん）の條（じょう）ハ云小田天菴（せんでん）ノ旗（か）下ナル小見河越

前守輝賢（まへのかげけん）ハ小櫻威（こさくらい）ノ鎧（よろい）ニ三牧甲（さんまか）ヲ着（き）テ河原毛（かはらげ）ノ馬（うま）ニ乗（のり）リ云

爰（こゝ）ニ梶原美濃守景國（かひらみののりかげくに）ガ家子梶原平左衛門（かひらけいざゑもん）トイフ者心（ものこゝろ）ニ思（おも）フ

様彼六人ノ者ハ近付テ討（う）タム（タム）フ叶（か）フベカラズ然（しか）レハ彼等（かれら）ハ

武勇（ぶゆう）ニ高慢（かうまん）シテ動（う）カスレバ諸軍勢（しよぐんせい）ヨリ先（ま）ヘ進（すす）ム出（い）ツル匹夫（ひつぷ）

ノ勇者（ゆうしゃ）トハコノ人々ナリ何トゾ一人モ二人モ射殺（しやく）サムト思

ヒ唯一人（ひとり）攬（か）ノ木（き）ノ蔭（かげ）ヨリ子（こ）ラヒヨリ既（すで）ニ二十間（にじゅうかん）ニハスギザ

リケリ平左衛門（へいざゑもん）矢頭（やがしら）ハヨシト悦（よろこ）ビ思（おも）フ様ニ引詰（ひきつ）兵（へい）ト放（はな）ツ其

矢アヤマタズ小美河越前守カノドブエニ葛巻攻テ寸破ト立
 ツ急所ナレバ越前守馬ヨリドウト落タリケリ云此六人ト云
 由良判官則繩戸崎大膳亮長俊行方ハ小見河ト
 形部少輔貞久海上主馬五郎武經也云と附録あり小田天菴氏
 治公旗下ノ城々小美河ノ城主小美河越中守と云也
 黒部川 同郡府馬志高稲荷入の村々より流を出づ是を黒部川
 と云ふ黒部の橋あり此橋より下を九十九曲川と云ふ屈曲凡
 二里許を流し小見川を経て利根川入る
 七本木 小見村の富光山徳聖寺庭中にある銀杏の木を云ふ此
 本周り二丈をかりまゝに寄生六本ありそハ 樟 松 楓
 南天 竹 ウシコロシ 是あり銀杏と云ふ七本あり依て
 名づくといふ
 清水観音 清水村あり清水寺といふ十一面観音を安置せ世
 人筆を禁食して小兒の病を祈る参詣駁一

又顔観世音 五郷内村樹林寺あり河り靈驗あらと云ふ 観世音也
 門外の高き石坂あり此石坂を逆さふ向て這下ると云ふ小兒
 の病を除くと云ふ宿願ふよりて参詣する人の皆さうさふ這
 おりるあり此の寺もと壽林寺と書しあや常總軍記ふ
 此所ハ千葉の軍大將東六郎鎮胤が領地あり六郎幼少の時よ
 り此の壽林寺ふて平跡學文も習ひ師弟のふと有る上地
 頭あり菩提寺ありいとくさならざる寺あり一うべ今とても
 折々まのりて他事なく申かこつと云ふと見えたり
 四季咲の櫻 庭中ふ出り周り五尺許石の玉垣をめぐらむ花一
 重ありむろろ小見川ふ有し櫻の種ありと或人いつり
 千大谷 本堂の後の山ふ至りて西北を望めばいと廣々こと
 耕地あり此の邊に一圓ふ千丈がやつといふ又千葉氏族の
 住し河よりふせむ千葉が谷とも云といつり東六郎が城跡ハ

平山と云所いへふて笹川ささ臺たいふ大門だいもんの跡あとあり
名物なぶつ笹川ささ蜆しんとて此邊こゝ石出いしで今泉いまいづみのあゝりま多おほく出いづ

椿つばきの海うみ 今干いま河か八万石はちまんいしといふは是こゝあり香取志かとりし云い神宮かみみやを相距あひさ夏なつ六里許むつりごほ香取かとり逆さか瑳さ海上うみ三郡さんぐんの交まじり接つき周めぐ匝り十里餘じゆりちり此湖こゝ水みづ今いまの消しやう歌うたして田園でんえんとふゆり古老傳こらうでんて言い大古おほいに此所こゝふ最大さいだいふ椿樹つばきあり高さ數百丈枝葉えん三里の間あひだに杖しやう躡し華はな咲さ時ときの天紅あまにふして散ち時ときの地ちに錦にしきを敷しくと疑うたはる吾わが大神おほいは影えい向むかふ此木こゝ壽じゆ盡まて根ねと共ともに自みづから倒たふる根ねの跡あと湖うみ水みづとあるあり回まて是こゝを椿つばきの海うみといふ上うへ枝えだの方かたを上あげ總すべといひ下した枝えだの方かたを下くだげ總すべといふ畧りやく此湖こゝ水みづの備ひふ椿村つばきと云いふあり椿海つばきふ回まて然しか躡しせり又また湖うみ水みづより逆さか瑳さ郡ぐん矢や挿さ浦うらふ到いたる夏なつ三里許さんりごほ然しかふ寛かん文ぶん中ちゆう人にん有あり官くわんふ達たつふ大命おほいを奉ほうて地ちを堀ほり湖うみ水みづを矢や挿さの浦うらふ流ながる水みづ陸りく田でん數千町せんぢゆうを獲とるあり斯これ人民じんみん移うつ住すて十八村じゅうはちむらとふれり各おのれ共ともに椿新田つばき某たがひの村むらと稱なづけ

世俗い于に河かといふ是こゝあり田海でんの變へん時とき有あり湖うみ水みづ變かりて民屋田園みんやでんえんとふきり然しかと今大宮司家おほい毎年まいねん二月初子にげつし丑うしの日ひ椿海つばきの祭まつりあり

是則古これ一いつ此湖こゝ水みづ神宮かみみやの池いけあり一いつ時ときの遺い則すなはちあり云いふ
石出いしで 此所こゝハ利根川りねがはへあり出いでるところふて常陸原ちゆうりくげんの砂山さなやまと

相あ對たい風景ふうけい至いたるは後あと千葉ちやへの氏族しゆくしゆ石出いしで日向守胤朝ひなたもりゆきあそ

鹿嶋日記かしまにぢふ云い流ながれのままににくくどどれれババ光俊みつとむねの朝臣あそみの霜しもふられ
たたるるななどどよよははままにに菟う原はら此こゝととゆゆととるる方かたよよみみゆゆその東あづま隣りん

ぬる日川ひがはといふ里さとふ沙山さなやまとて草木くさきふもなく砂すなのの立たつたつたのの不ふ
さる高山たかみやまあり右みぎのううららの志しもつつああささの國くに此香取海上かとりうみのふふ

つつのの郡ぐんははささたりたり海上うみといふハ山上かみやまの憶良おくらの臣おみの鎮懷石ちんかいしの
歌うたのの卷まき五ごははここれれををととねねききつつ深江ふかゑののななりりみみの子こ負おれれ原はらと

よよ免めんををねねりりハ海うみのの石いしとりとりあるあるよよハ名なふふりりりり此こゝににこ
ままのの河かののひろひろささ坂東道ばんとうぢゆう七里しちりああもも何なにありありぬぬべべーー云いふ

湖城
喜一
寫

石出より
常陸の
砂山を
見る場

砂山



岩井不動 岩井村ふあり二王門本堂鐘樓堂いとぞごそろあり
山の上より清水落る瀧口數る所有り四十八瀧堂の後の方ふ
大瀧何り病人死生の願此所ふ垢離して護摩をとく死病の物
を忘るといふ

下間ふか巴うぬ開伽の帯うぬ 蓼太

奥の院不動明王ハ春日の作といふ同岩屋二丁むりり通りぬ
け瀧あり左右ふ三十三所の觀音有り大師遊歴の地と云

猿田大権現 猿田村ふあり諸國圭齋録下總國神社部ふ三十石

猿田権現海上郡猿田郷 石毛伊織ととも又新義真言部ふ十石

海上郡舟木郷 東光寺ふと見えたり

高田川對陳 常總軍記ふ云畧斯て常州岡見の長臣栗林下總守

義長の印西松夷臺より此處へ陳をうつり利根川を背ふあて

て高田川の岸ふ陳物惣勢合て五千餘騎旗さし物を風ふ靡し

隧伍整々と備はりまご千葉方ふ東六郎鎮瀧を大將として

三千餘騎次將ふ二条大藏五百餘騎鳥居統後五百餘騎村田

兵衛五百餘騎千葉が旗下のあつ海り勢その勢都合六千餘騎

高田川の端ふ押ふせ川を隔て矢軍ふ數日をおくりていまご

墓々しき軍もあうりりや爰ふ義長熟々と思ひりるハ千葉ハ

主戦ありて目ふあまる大軍先手さでふ六千餘あり後陳あり

は多バ二万をさるべし我ハ客戦ありて味方ハ小勢あり自余

の如く軍せむ千ふ一つは勝負ありしつ千葉方の大將共

比不和とあるべき反簡を行て同士軍させ其弊ふ乘て兵を出

して勝負をさそべしと思ひ志むらく其術を工夫しりるがき

いと考へ出して腹心の家人を潜り小壽林寺へ使ハし主人の

病氣平愈の祈禱をたのむ其御禮として貞宗の太刀一腰并ふ

神馬一足飼料として黄金十五枚を奉納せらるる爰ふ千葉

の惣大将ふ命ぜらき一東六郎の武運長久の祈をたのまんと
 壽林寺のいり法印の對面一戦場の習ふをバ再會の期一が
 一とまづ酒宴をありりふ額殿の侍あき置る馬を見つ
 け立寄て是をよる小黒のぬとき逞まき馬の八寸餘
 きる名馬あり六郎常馬を愛する直ひとくありぬ男あれ
 バ頻りふ是をほくあり誠おむく一宇治川を越一摺墨もい
 りでう是お増るべき天晴の駿足ふこの馬に乗戰場お出る
 あらが海山も一飛あらん願くく此馬某あたびめつと頻お
 是を所望しられバ法印も出家の身故馬の入用あり去あつ
 他の人あらんふ奉納せ一人の思のくもあき辞退もまき
 き直あれど君の大檀那といひ殊小國の守あり師弟の約もあ
 せバ黙止がく一所望お任せ進上せんと申されり六郎大お
 よろこび観音の寶前へ米五十俵を奉納して馬を率てぞ帰り

ろり義長の思ふまふふ斗策あれりと心ふるあづきむそろふ
 敵の陳中へ忍びをいせ云一めりる此度壽林寺の吹峯あて
 六郎殿の義長の味方とあり近日高田川を打渡一合戦あつて
 ろあつて裏切をべしと淺瀬をも案内しむそろふ契約せられ
 られバ義長が秘藏せし黒の名馬を六郎殿お参らせり是の
 乱軍の節六郎殿の目印ありとふこと一やろ小雜説をぞ申な
 る此殿づけといふむく一足利の代お詠良今川を殿つけ
 るとて吉良殿今川殿とよび公方たぬる時ハ吉良より縋べし
 吉良絶る時ハ今川よりつぐべしと御證文を下され惣下座お
 尊敬せしとあり又大閤秀吉公の御時ハ大和太納言秀長徳川
 大納言家康公を殿付にせり御當代いたりても御三家御
 殿の類殿つけ惣下座ありされバ其頃千葉の家おてハ此六郎
 びんとあり二条大藏鳥居村田是を聞き大おあやしと疑ひ
 りてされバ六郎殿逆心ありとて評定ふし二条下知して六郎
 を招き饗應の帰り路岸山とつふ難所お伏兵を置鉄炮を以て
 討取べしとえりりりどる六郎是をさどり道を替て戻り

らむむすく是も止らりなり斯て東六郎の大ふいかり二条
が伏兵も既ふ命もあやうらりしが此度ややくも悟りらば其
場をのがれまぐみ陳所へ押うけて大藏を討ん変安しといひ
ども内乱をおそれおとるふ今大藏二条へ歸りたる上ハ何の
おそるゝ處あらんと逞兵百五十餘騎をよこし二条が館
へ押寄我こそん東六郎鎮瀧あり岸山の謝禮ふ推参せり首を
渡さべしと云もあへぎ真一文字ふ切らる大藏も六郎と聞
しうバ今ハのぐぬ處と思へをせ出て戦ひしが河うの六郎
ふ及ぶべき終ふ切たをさきりるを六郎も郎等堤大助をせ寄
て首を取しうバたちまち館ふ火をかけ一遍の煙とをありお
りり 東六郎鎮瀧より七代の祖東下野守常緑ハ千葉常胤卿の
宗族御先祖の御分郡として東郷をたぬりたりるふより
千葉下野守を改て初て東の下野守とを号しなるおめ下野守
ハ歌人あり今地下ふ歌道の傳はる此人より始る東下野守
りりハ是此高弟を種玉菴宗祇といふ宗祇の傳を三條殿へ
はらへ道遙院稱名院三光院其御子を圓智院公國といふをめ

御子を三條大納言實條といふ公國の高弟を細川玄吉法印と
いふ古今の傳受を丹後なぶべの城あてうへに奉りし度その
頃の書ふくハ此下野守ハ此度とくく佐倉へ聞しう
東六郎より七世の祖あり 此度とくく佐倉へ聞しう
ハ千葉勝胤家臣小命トて次第を正し一老臣原式部が父胤總
入道了月大須賀小隠居して在るを招ぎよせ評定ふ及られ
バ了月が日二条大藏ハ敵の斗策おちりり我罪おのれとせ
むる此處也六郎殿ふハ一点の不忠ふ猶又此度高田川の夜
軍小鳥居村田荒海の三將打死せし由聞及べり又義長今度兵
を出を更全く千葉を亡がべきふもあへぎ唯武威を志め
はの一通りあらん此度の御和睦有て然るべしと則神大寺和
尚を頼と小見川越前守ハむり天菴の旗下めて相知れる中
ふまバ小見川を差添義長の陳遣しるも義長も尤と約し
まふのち勝胤の姫君十三女あるを岡見傳喜が三男谷田部の
岡見主殿どのと妻と約し傳喜どのの末の御娘を御舎弟大須

賀四郎胤信の妻と約せしめ両家をもとめて人質を取かす
海八幡宮 芝崎村にあり諸國圭齋録下總國神社部小三十石
八幡海上郡芝崎郷松本長門とも例祭六月十五日出興あり
尤三座ありその海上八幡と松岸の宇賀大権現と本所の妙見
宮あり右三座の御輿一箇年の垣根村御假殿まで一箇年の鉦
子長崎の濱壘石の上まで是隔年あり
世人此邊よりをべて鉦子と稱ふ

松岸 鉦子往來の旅人此河岸より揚る滄肆有ていと繁昌あり
地あり是より長塚木城松本今宮荒野新生ふとを経て飯沼の
觀世音ふいふ一里總常日記小松岸といふ小舟をてり
とより飯沼かけて岸ふのぞめる家居ども見とさむ小時
ぬ雪のありはとるあちとる皆蠟の貝もてふるあり

り里此川みて蠟のおほくとらるる夏思ひやるべし

鉦子 下總國海上郡鉦子の湊に大日本東方の限名 犬坊崎と云

ともく 鉦子の関東第一の湊ふし人家五千餘ありとい

ふ西の松岸垣根芝崎をりたり南の三崎小濱をかぎりたり北

の利根川の末湊ふいり東の大海あり其間方二三里ふおよ

べり飯沼山圓福寺の本尊十一面觀世音坂東順禮廿七番の灵

場あり松平右京亮の陳屋の南の方ふあり東のうら飯貝根

をそめとして長崎より外河まで獵船の出入りげく濱邊ふ

の魚油干鰯のこざおきふ老少男女昼夜をとりとる湊のうら

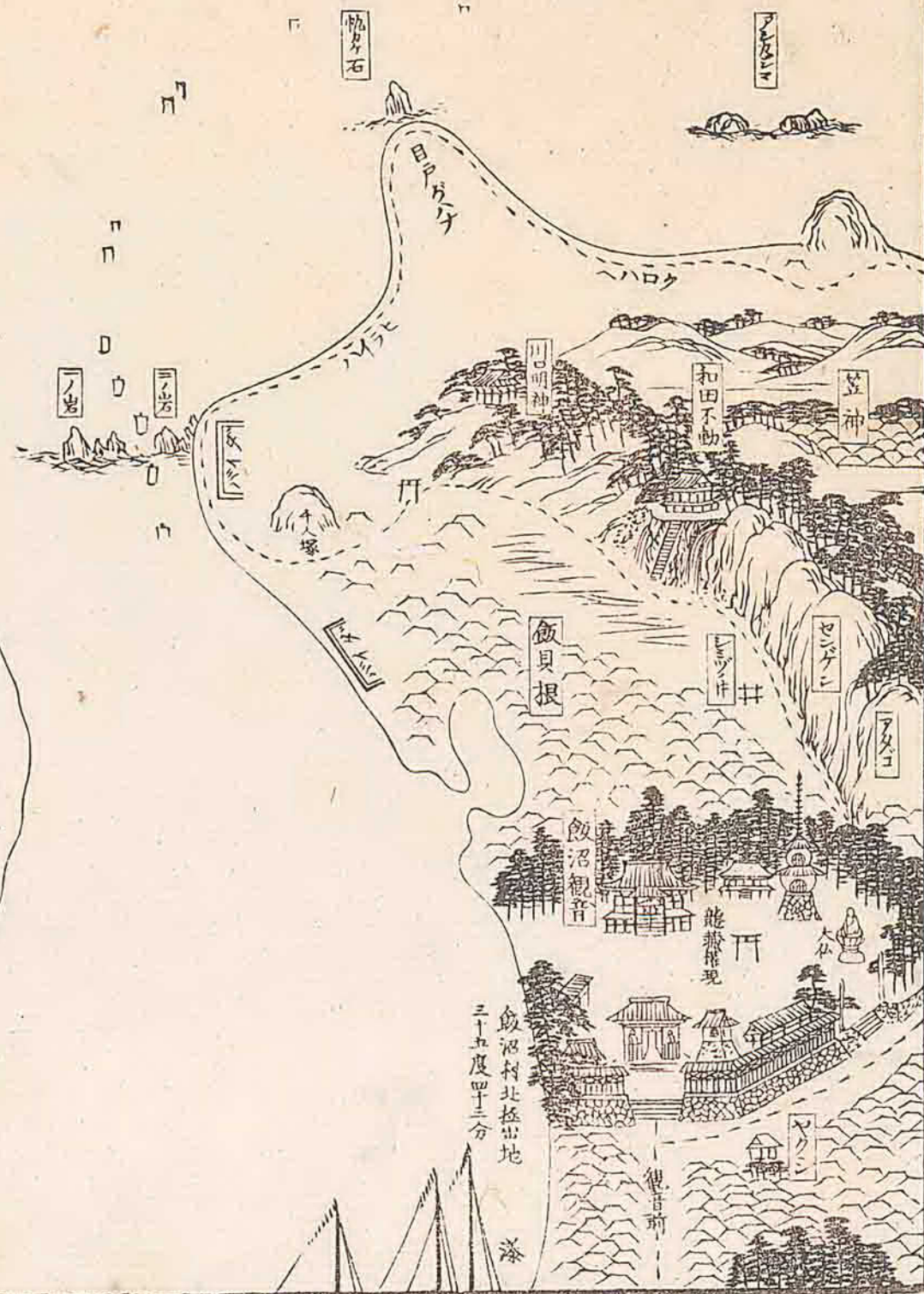
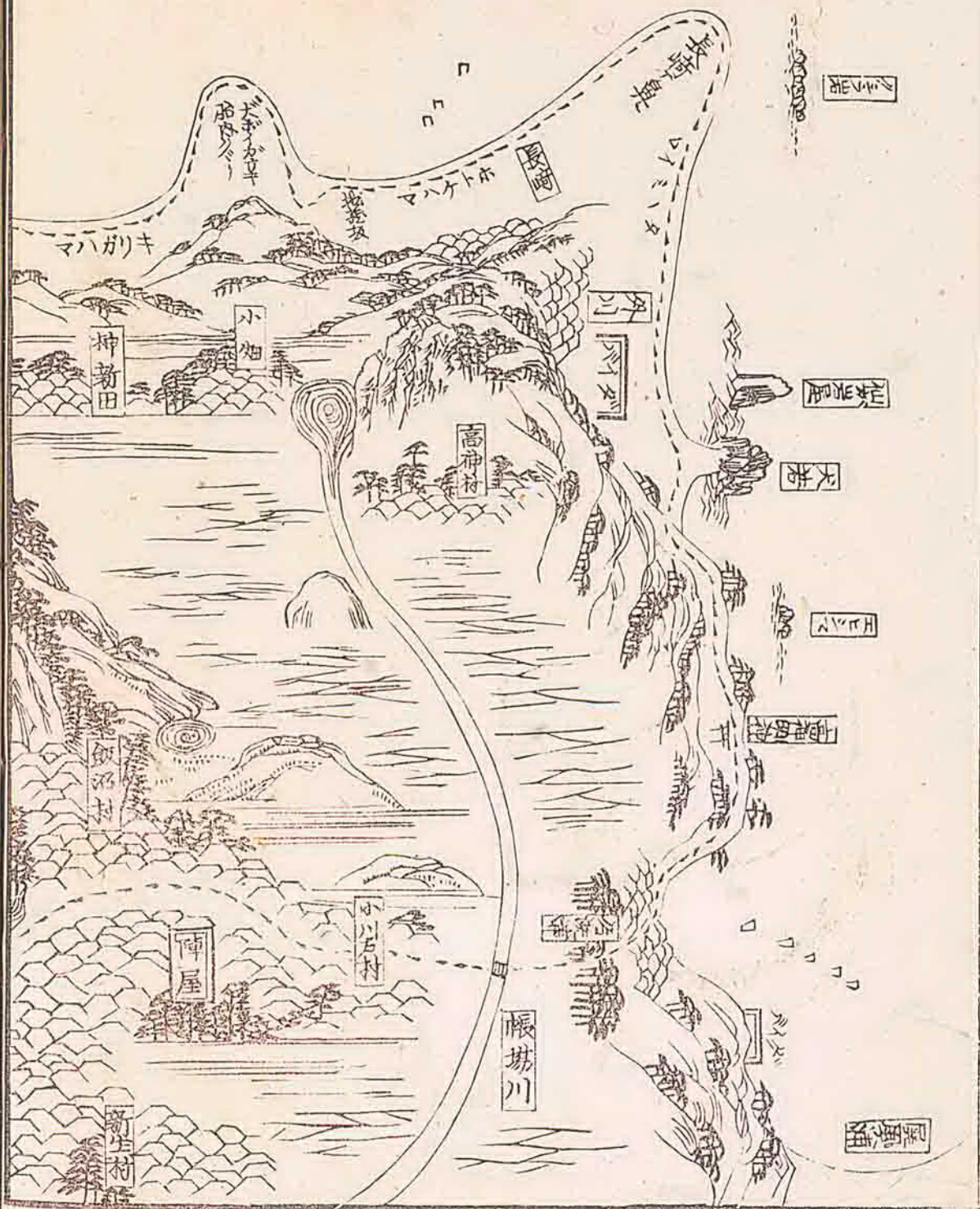
ふの整々たる町家新生荒野今宮松本あり本城松岸の両町ふ

の遊樓の全盛いふむりありまの佛院ふの妙福寺華の妙見

堂法満寺向の伽藍淨國寺土淨の五百羅漢の石像ハ庭のうらふ

あり松岸の良福寺庭中の糸櫻高神の石山寺天台威徳寺真の藥

鉞子濱磯巡の圖



洲
羽寄
帝陸原

師如来ハ天竺より渡らせり尊像といえは東の方へ
り出さる山の上ふハ和田の不動堂石階の左右ハ龍あり其の山
小登れハ後の方ハ蒼松の黛色濃ありて前ハ東海ふのぞと奇
岩左右ハ聳へて風色斜ありて濱めくりの人もまづこころ
憩めて時をうらまけ勝地あり

飯沼觀世音 飯沼山圓福寺十一面觀世音 坂東二 二王門鐘樓垣

本堂の額圓通殿得水書 二重塔龍藏推現 銅石華表あり境内ハ

見世物輕こぞ志むる其外茶見世多く至て賑ハ

定芝居ハ今宮の芝町ハあり 座本 梅本妻太夫

諸國圭齋録下總國新義真言部ハ三十石 海上郡飯沼郷 圓福寺

とともゆともく〜といへる名ハ志摩の國ハ蒼志と音ハ

よハたれハ假名も天不志とかくべく詞の心ハ出伏ま〜ハ遠

伏ふとれよ〜あるべくおぼゆと與清鹿嶋日記ハいへり

寛齋遺藁四 遊銚子感事而作二首

風波千里幾辛艱孤負春光忽自還何計平生如意筆却教今日

恨空閑

東海之東渺々波飛帆礙眼亦無多春雲底事癡頑甚不使我爲

觀日歌

去の外五山堂詩詠ある種々の書ハ詩歌等多く見ゆれと畧

名物 千リメン白魚 鯉の塩辛 鱸 牡蠣

防風 松露 傘の醬油 廣壁ハ一尾 吉野屋料理

海藻蒟蒻 世人飯酒 味噌汁ハ煮て産婦あとそらの藥と云

觀音より西の通ハ觀音前荒生中町田町荒野橋本町竹町通町

袋町明神町萬町芝町富田屋町通石町今宮目出度町今宮芝町

唐子町夫より大込松本本城長塚松岸小達

ま〜觀音より東の方を飯貝根とゆふそハ 芝町入町濱町濱宿
田中町五藩町和田

町、清水町、橋本町、通町、田場町、植松町、東中町、是あり

清水の井、飯貝根清水町ふあり、方二間をうり石ふてかこま

る井也、銚子第一の清き水あり、水汲人終日群集ふ

和田不動堂、和田の南山の上ふあり、石坂の左右ふ瀧あり、風景

至てよ後

川口明神、川口の方へさし出たる山の上ふあり、拜殿ふ白紙大

明神の額うくまり是より川口を眼下ふ見おろし常陸原より

鹿嶋の浦奥州の浦々迄も見渡さる鹿嶋日記ふえもいえぬ磯

べのさま岩れたるまひよせろへる浪とりあつめたるあ

れさ言をふもふんであもはくしがとめどがのふ帆うけ島

三一嶋ふどいづれもめづらしさふ目ひらうれぬたきめろと

へ東の海雲ふつたてそれたをみをあらは

ねねた海北沖あ枝えもみえふくにいりぞう浪の花の咲覧

云傳ふむう四日市場村ふ長者あり其娘を延命姫と云ふ富
田屋町の形部と云ふの媒ふて阿部清明を婿とて小濱村の海
至て見ふく清明是をたらし長者の家を逃いで小濱村の海
の端小草履をぬき捨身を投さる躰ふふ置同村西安寺ふ入
て忍び隠る姫後を追うけ此所ふ来りの草履を見て大おなげ
き我もとふと思ひ定め海へ飛入り底のみくを成ふと
斯て姫の尸川口ふ流れ来りしを所の者共引あけて藪と掃と
を納め祭りし故ふ藪掃大明神といえりるをいほの頃ふら
白紙の字ふあやまれりと云此神もとより顔形のふくきを
うとふる故ふや世人髪の色あり或は顔のできも此あざふ
の人揃を奉りて祈誓されバ験あり或は顔のできも此あざふ
と有人ハ紅粉おしを奉りて祈ふ神妙不思議の靈験あ
りとぞ又銚子濱長く不獵の支あせバ川口明神をいさ免の
口明神へ奉る奇妙ふ
大獵と成といえり

千人塚、川口ふ有りむらし獵師の海中ふ溺死しあるを葬りし

塚也と云石像の地藏尊建り毎年七月銚子中の寺々其日く

の定めありて此塚の上ふて施餓鬼あり何人の詠ふや

うとかよこれえしあはむらむらして今ふ泪どのほゆれ

ぬる塚まじ獵船の風あくくして帰りおそき時ハ此塚のうへ

ふて火を焚川口の目印とさる由ふて頂ふ火を焚一跡あり此
塚の側ふ鉄炮の臺場あり世人川口の御臺場と云

川口 則ち鉾子口あり岸ふ添て一の岩二の岩とつめて大
る岩二箇所あり其間凡五六十間許此岩より常陸の羽崎迄ハ
程遠けきと海浅くして船通せ依て此岩の間を出入を至て
難所ありといふ大荒浪の岩ふあつて打くさけるさぬいと
おそろし

是より南の方へ磯つゞきふ行を濱めぐりと云名所多し

目戸が鼻 東海第一の出さきあり川口より此所までを平磯と
いふ色々の名貝小石多し帆うけ石ハ海中ふたてり七月廿六
日の夜鉾子中の老若男女此所ふ出て月待を群集大方多し
葦鹿嶋 めどが鼻より此所までを黒ハへ濱といふ黒石多しあ
しう嶋ハ岸より四五所許をたれて小嶋ふつらあり年中あり

此嶋ふあがる夏二三十或ハ八九十多き時ハ二三百足おも

及ぶ波打ぎつふひとつの岳あり是ふ登りて望する小救百の
ありうかさあり合上ふあり下ふありるい遊ふさぬ大の子

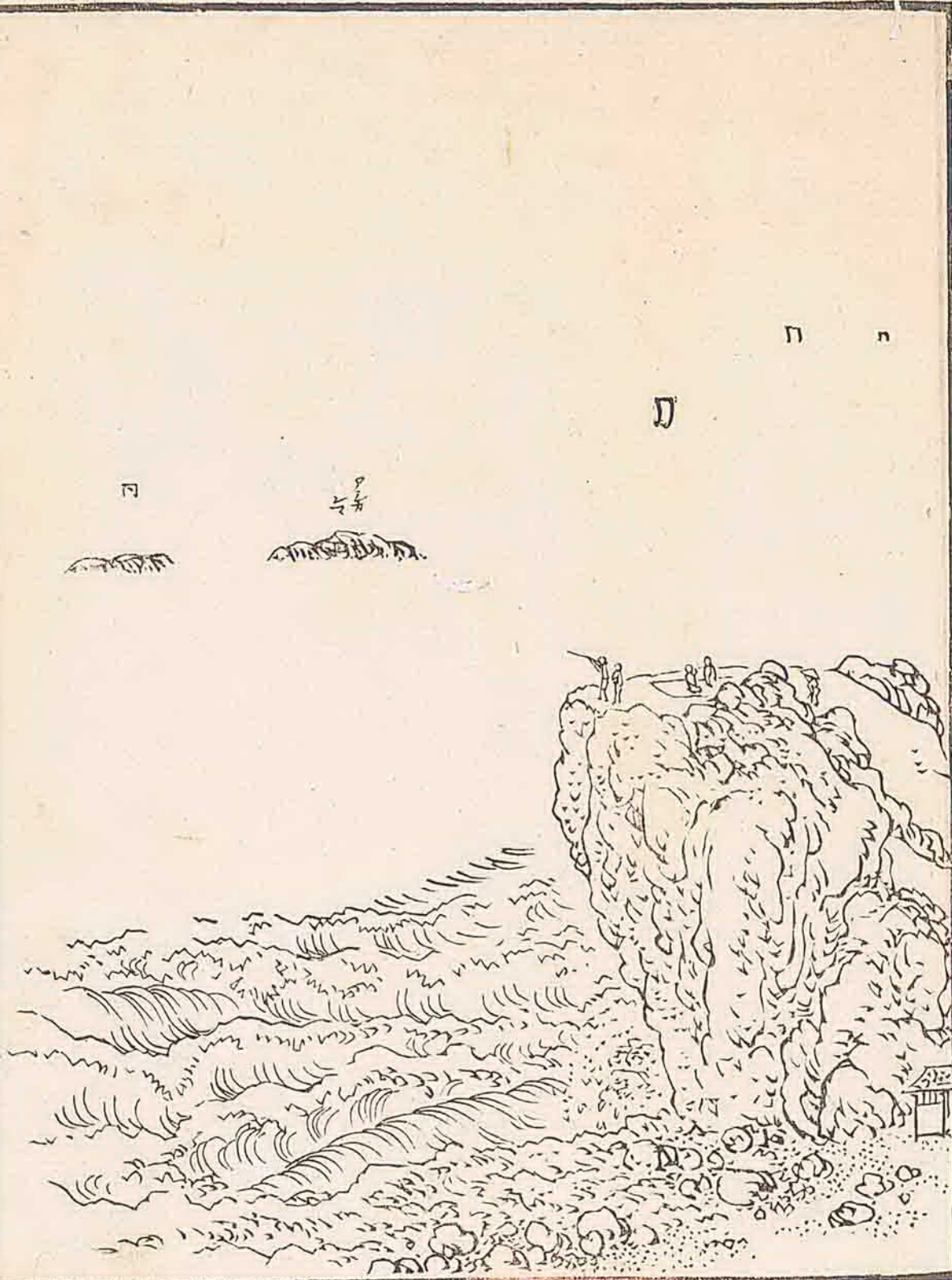
の乳を争が如し其鳴声白鳥のふくが如く遠く追聞へてさハ
がし中小大海瀬一疋高き所ふ登り四方を見廻し一番をふき若

船近する時ハ鳴て群を驚馬うし悉く水中ふ飛入る是をありの番といふ
出の番いつふても居らぬ夏あり鳥銃を以て打扱る大さ八九

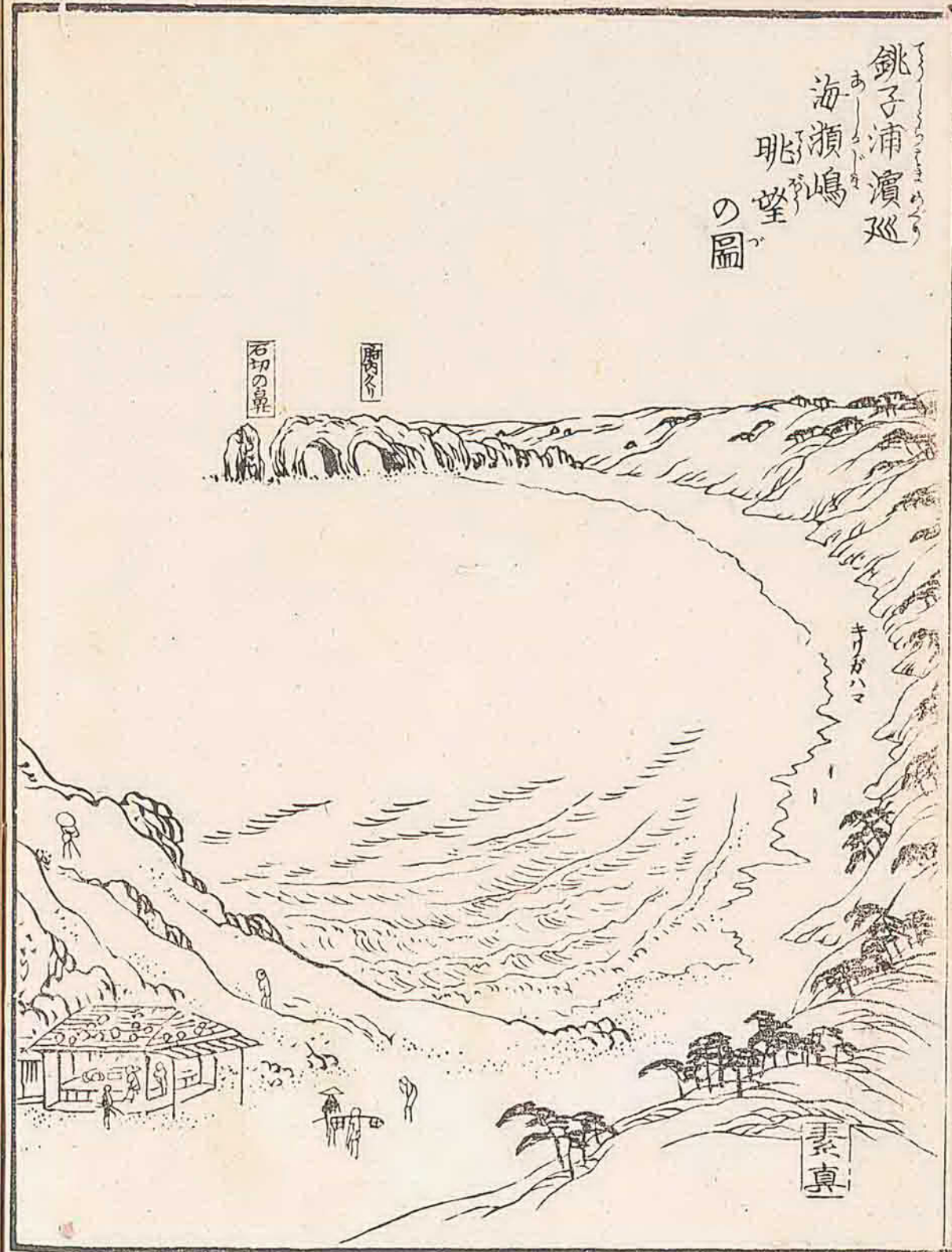
尺を大とき海中を行時ハ半身を水上ふあらハ立て潮を飛
し行く甚畏るべき状あり按ふ紀州日高郡衣奈庄大引浦より

地方を離ること四町許ふして周圍百四十間餘の小嶋あり毎
年秋の土用前後ハ海瀬此嶋ふ来りて春の土用前後ハ何

きより歸る云小なるものハ長さ五六尺大なるものハ一丈二
三尺ふ至と挑洞遺筆ふ見えとせと鉾子のありうハ年中居り



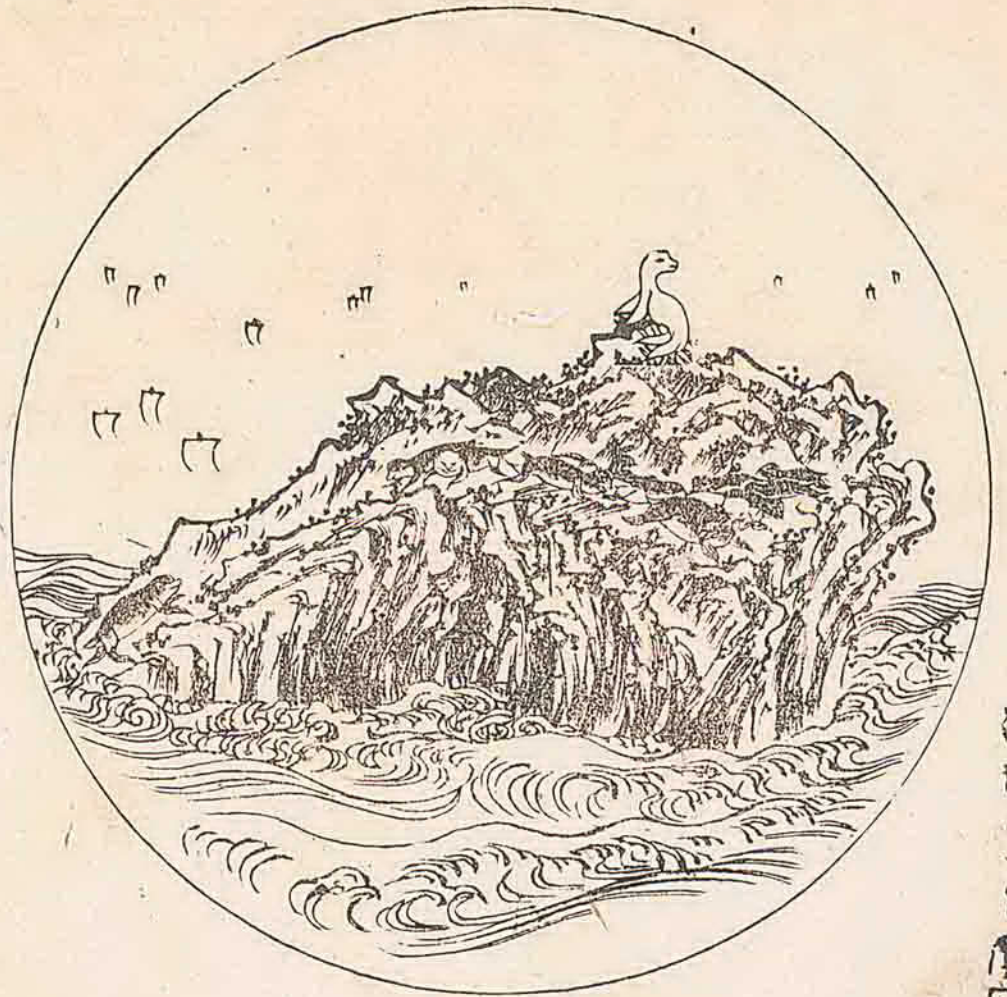
銚子浦濱巡
 海濱嶋
 眺望
 の圖



海獺の圖



海獺島を
望遠鏡とめりくひにて
見るみるる圖



大ききもまゝ八九尺ふ過すきさきと形状かたちの同おなトさまあり頭うしろ小く口くち尖とがり齒は牙が大おほの齒は牙が小こ似にたり目めの大おほく耳みみ至いたり小こさく吻くち鬚ひげ粗こく長ながく全身しんぜん短みじ毛けあり常つねの品しなの毛け茶ちや褐こ色いろありままく白色はくしき黒くろ白しろ雜まじ色いろ蒼あせ黒くろ色いろも有りあり右みぎの扁へん鬚ひげ爪つめありて末すえふ岐まがあり尾びの獸け尾びの如ごとく小こく至いたり尾びを狹せまく又また兩りゆう鬚ひげあり是これふ爪つめ五ごツつのりて末すえの分わかをて指ゆびの如ごとく奥おく州しゅう津しん輕けいふて此こ鬚ひげをテツつピひといふ又また臘ろう胸きゅう獸じゆうのヒひも鉄てつ魄はくと名なけ皮かわの禱たうとふふ或あるは馬ま臭くさふ用もちひ或あるは荷か包かふ製せいを肉にくの剛ごうくして味あじ佳よあらば本草ほんそうふ主しゅ治ちを缺けつく東とう鑿さく寶ほう鑑かんふ曰いは味あじ鹹かん無む毒どく主しゅ人にん食じき魚ぎよ中ちゆう毒どく魚ぎよ骨こつ傷やう人にん及およ喉のど鯁けい不ふ下げ者しや又また時とき珍ちん食じき物ぶつ本ほん草そうふ曰いは味あじ鹹かん甘かん平へい無む毒どく食じき之し消しょう腫しゆ及およ癰おん瘤りゆう邪じや氣き結けつ核かく骨こつ燒しやう灰かい服ふく治ち鼓こ脹ちゆう腫しゆ滿まんまま脂あぶらの金きん瘡そうふ傳でんて良よ云い一いつ説せつふ海かい獺たの大おほきものものを蝦え夷いふてトとといふ又また紀き州しゅうの阿あ志し加かの海かい驢りゆうあるべべといえりニに千せんとトとといふ同どう物ぶつあり海かい獺たと海かい

驢りゆうの同どう類るいふふて別べつ物ぶつあり形かたちち海かい獺たより大おほくくて體たいハ瘦しゆうせ其その毛け淡たん茶ちや色いろふふして左ひだり右みぎの緒おの海かい獺たより短みじくこれをもて異いととを此こゝ外ほかふ海かい豹ひょう獵りやく虎こ臘ろう胸きゅう獸じゆうその外ほか海かい獺たふ類るいる海かい獸じゆう甚しんど多おほく云いてと諺ことわざふふ縮しゆくの大おほきハトとといふいふと世よ人にんもよく云いてと夏なつあり先せん年ねん銚しやう子しの濱はま近ちかき所ところふてトとの死しくあるを拾ひろひ人にんあり是これハトと天上てんじやうせんとして途とち中ちゆうより落おちるもの也なりと土つち人にん云いふいり其その形かたち尋じん常じやうの縮しゆくより大おほきれども別べつふ替かる夏なつあつた鱗うろこの間まより太ふとき毛け多おほく生な出いり頭あたまより尾びの方かた段だん々々と毛け長ながく尾びふ至いたり長ながさ二三寸さんすんみも至いたりりとぞ此こゝ外ほかふも如此かくトとを見みるもの折お々々ありといえり是これもトとといふものみや按おるるふ海かい獺たの大おほきをトとと云いといふいハ此こゝの海かい獺たも天上てんじやうままるものを見みえり想おぼ山さん著ちやく聞き奇き集しふふ文ぶん豊ぶん後ご國こく佐さ伯はく彦ひこの藩はん士し聞き某か七しち郎らう右みぎ衛ゑ門もんと云いて側わき用もち人にん砲ぱう術じゆつを好このんで江え戸こ表ひょう火か術じゆつの師し家け淺せん某か七しち郎らう右みぎ衛ゑ門もんと云いて側わき用もち人にん砲ぱう術じゆつを好このんで江え戸こ表ひょう火か術じゆつの師し家け淺せん

六 銚子

羽某の門人也天保五年甲午九月山嶺をせんとして一兩輩と共に
小六奴玉の鉄炮を携へ佐伯の城下より一里半程有る海岸
雲止山と云ふ遊びくる小海上俄に黒雲を生じ烈風海水を卷
あげ暴雨車軸を流し山海鳴動して物凄く遊士も側ある堂へ
入て海上を眺む小何となくあらざ海中より雲ふらけり昇天を
有さぬめて雲間小火焰ひらめき真一文字小あふを差して
鳴り来る間氏の勇猛の人ある故直小鉄炮を構へ矢比を待て
彼煽々たる火焰を目當大空を打つる小手ごとくもあけむらば
打そんどたる度と心得其内小雲も吹拂ひ晴天と成る由急
さして心小留む其日の帰宅ありつり々々して夫より三日
め小同國北浦と云所の獵師何とも知をぬ大なる海獣の汐小
つきて海濱小漂差せし由代官所へ訴へる故城下より小目
付役を初め役人あまると相越段々様子を窺ひ見ると老海獺と

見えて惣身短き毛あつて色の茶色あて背通りハ黒く濃く腹
へ薄茶色あて鱗大きく惣長さ七間三尺横中九尺許有て實小
老ぐらゝき海獺あり役人逐一吟味しなれども惣身小聊々の
疵もあつたが尤の目小穴ありさぐり見れば六奴の鉄玉出さ
りしを正しく間氏の打たるふりと此道具さふ主君の聴小達
しるをば打つるものゝ手柄ありとて則間氏へ下されしと也
依て城下へ引取まづ皮を剥肉を切ふ背骨ハ思ひしより細く
外小小骨もあつ惣身肉の多小く白色あつて油多く味鯨より
美し此肉勞症の薬よて一度食へば子孫小至る迄其病ありと
て一家中ハ申ふ及ばを遠方のもので間氏へ食小来り或ハ
貫ひて行も多小く悉く施し盡したりと也さて其皮を泥障と名
して第一を君侯へ献し第二を國老小贈り第三を江戸小持来
りて師匠の浅羽氏へ贈り其餘をべて泥障十八懸とありしを

同僚の人々も分ち與へると也。まべて海濱あつてハ魚龍の昇天
 まる夏折々有ものありと云。右師家の浅羽氏の主馬政徳と云
 居の人あり諸國ハ門人も
 多くありて名高き人あり

カン石 海瀬嶋の邊海底より出る黒石めて里人カン石と唱ふ
 石貨石炭の類もて至て上品あり黒色光澤漆のおと予
 を藏を高さ七寸

方五寸むうり何

アまハ獵師の綱

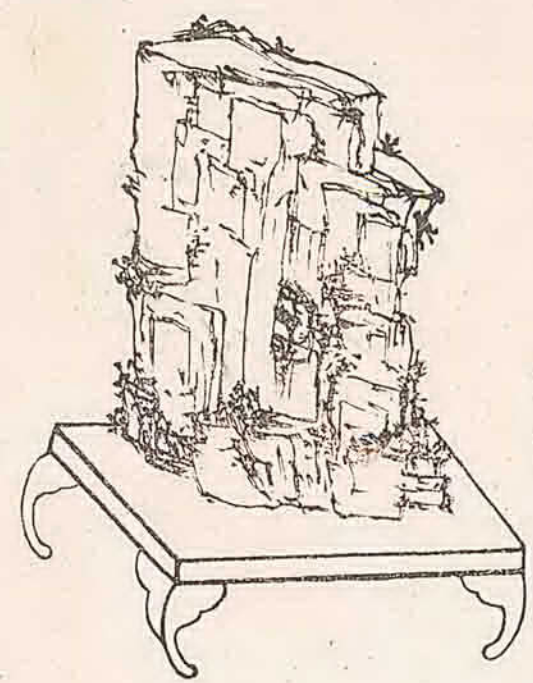
みかゝりて海底

より出るものか

り故ハ大なるハ

多一と云 大抵ニ

大とハ如此大なるハ多
 と也里人大ハ珍と也



犬吠が崎 海上砥荒砥是より出る 故ハ石切の鼻とも云此所ハ

胎内くゞりといハ岩窟ありて浪うち涯へ通りぬけ岩山へとい

登る甚ど難所ありありハ嶋より此所までを霧が濱といハ大

浪の打寄る砥輪もまが浪あぶき飛散て常ハ霧の暗さるが如

一砥石山より地蔵坂を下りて佛濱を通り長崎へいハる

長崎が鼻 東西の限り西の長崎ハ對しての名ありと云此所ハ

獵場ふりて漁家あまこ建あらびはくろそぬ岩木を庭の姿と

大なる岩のおも一ろき形してあこりの小嶋ハ岸うつ浪もま

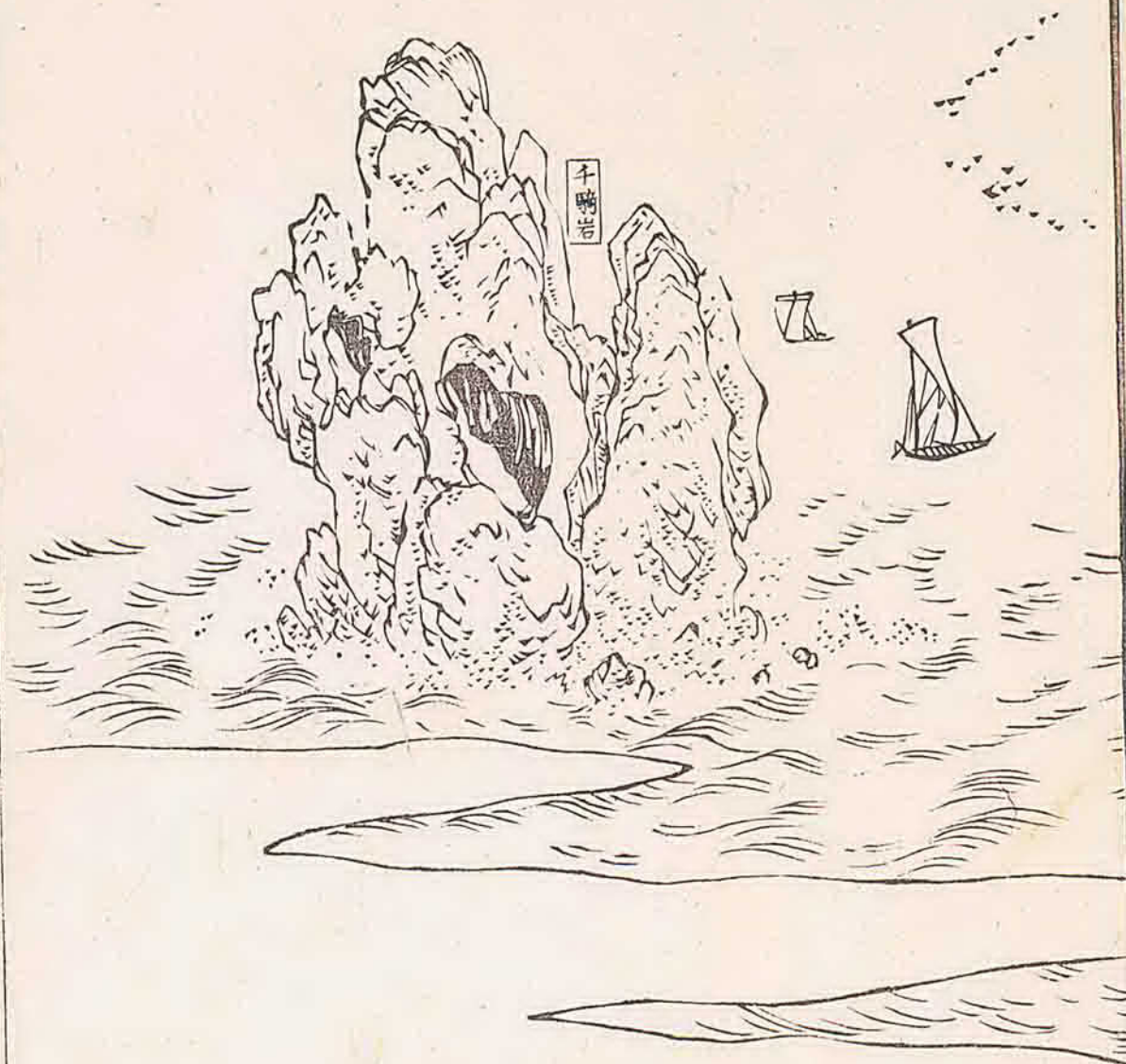
かこをかかハ風景言葉ふはくハ難ハ是より疊礫と云ふ出づ

黒き岩墨を志はくハ如く沖の方ハ鯨岩といハふがあり海

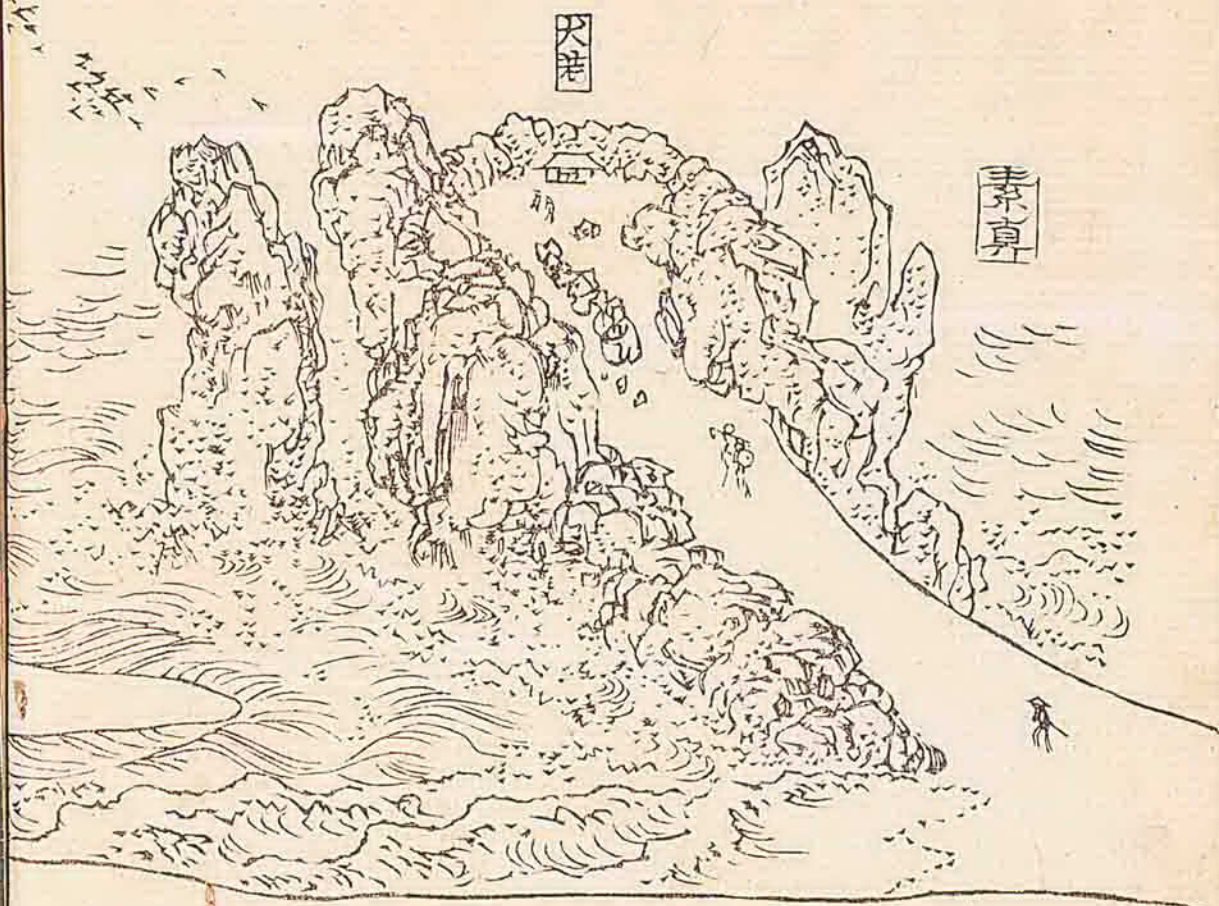
上ハ鯨の浮び出さるがおと一ハを過て外川ハ至る

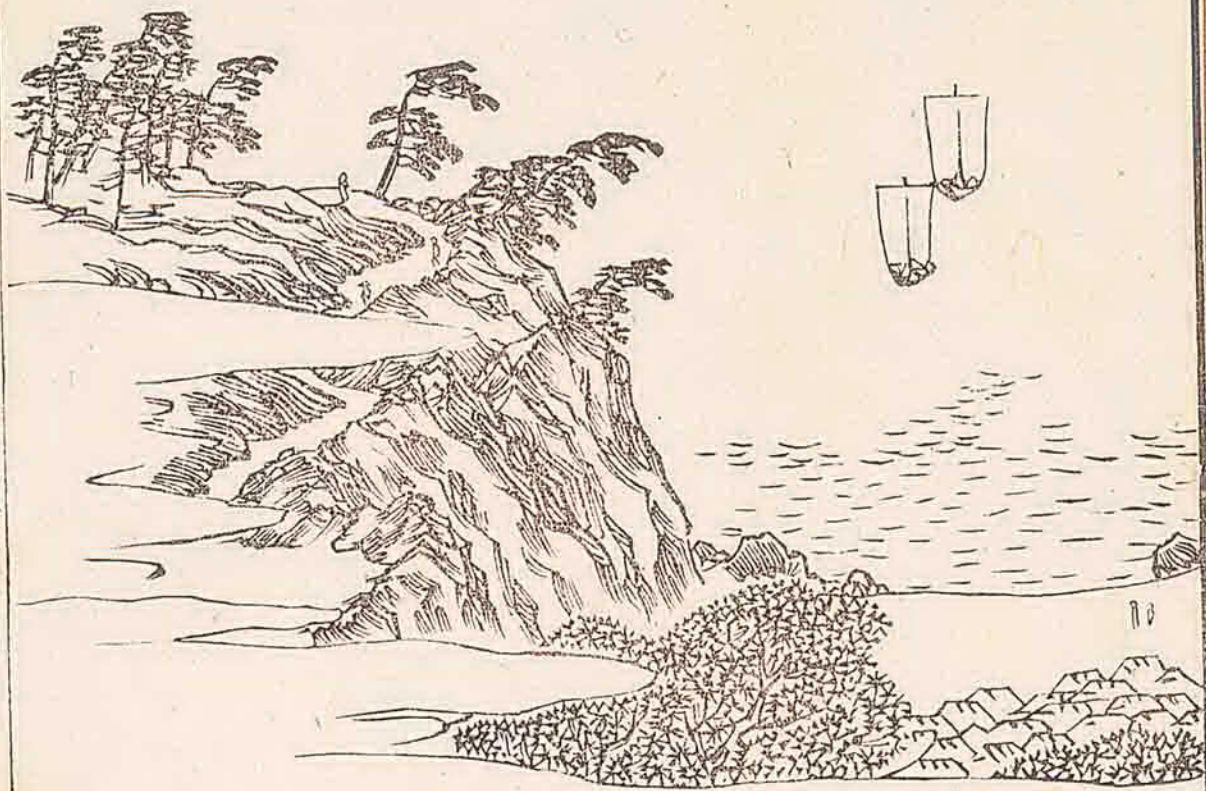
外川の濱 此所むうハ家数千軒有ハ獵場あるを今より七八

十年前津浪めて家を流され亡失一ハり志が今ハまハ家数

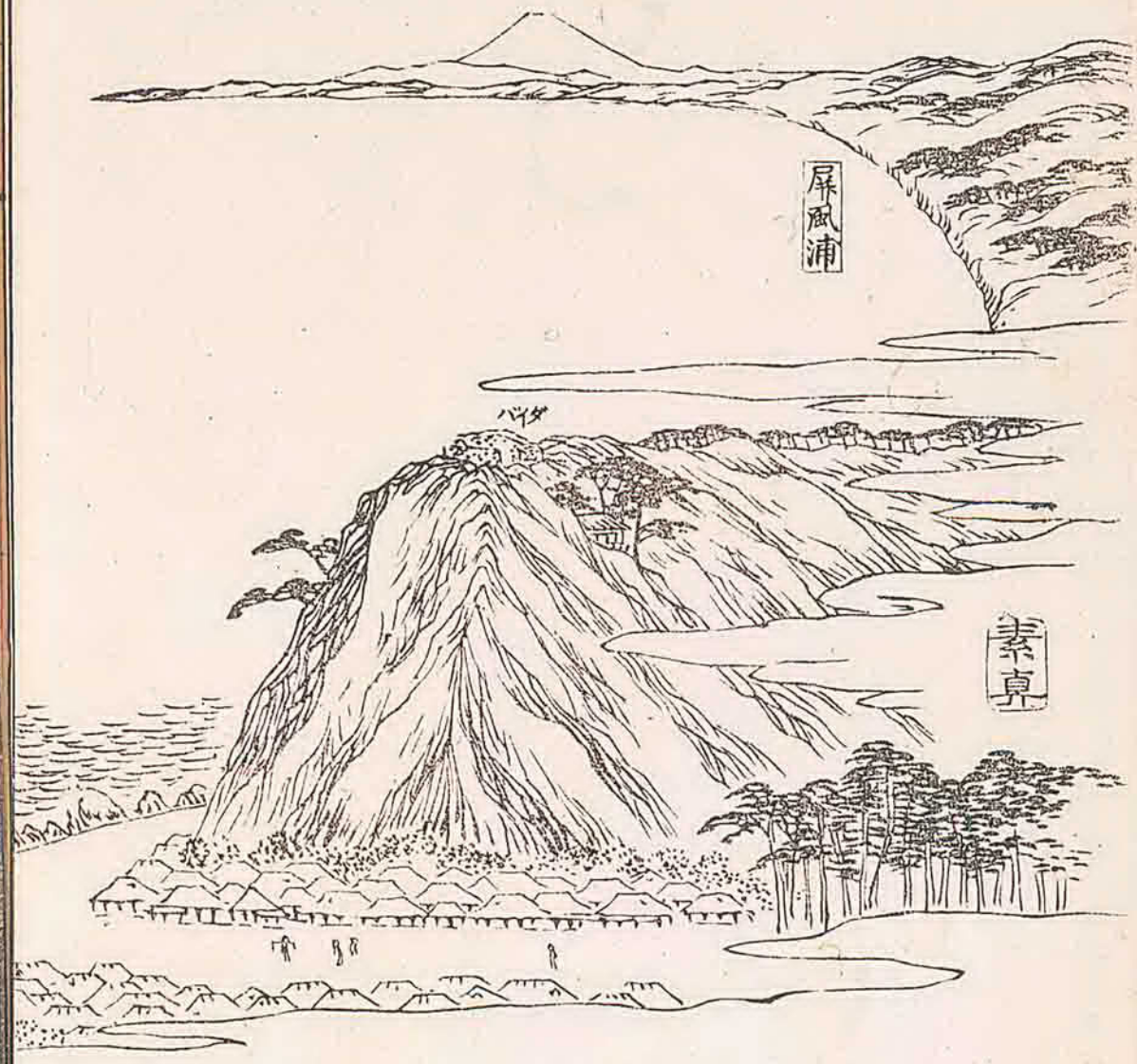


鉾子浦
大若子
之騎嶋
圖岩





銚子
石洗
濱
の
圖



屏風浦

素真

多く出来て大獵場とあきり南の方海へ向ひて鉄炮の臺場
あり是を外川の御臺場と云

里人の云くより五六里許西の方東の庄といふ村あり三
十三が村の鎮守ふして應神権現を祭り祭禮ハ廿一年めの
四月八日外川の墨岩の上小神輿御濱下り有り見物の老若群
集夥一云傳むろ一外川の宮三夫と云もの老母との濱邊小
てうつろ船みて流されたる赤子を拾ひ老母の急もとりふてと
り揚來り養育せしとありいづる故ふて此子を後應神
権現と祭りしとぞ其例ふよりて祭り毎小歸輿の節今ふまの
宮三夫の家小立寄御小休あり其時此家の老母神酒ふとを奉
りて饗應一志をらくして老母ふるき箱より急もとり取出し
御輿の上ふかふせてゆり動ろ一あからサおろ急もとのをた
ちやきくといふ夫より御輿を上て歸輿ふ及ぶと急も

仙ガ岩屋

外川より南の方岸より一丁許離れて海中おたてり

周圍二百間許り高さ四五丈も有べし汐干たる時ハ歩ふて渡
らるされど常小天狗住より云く故渡る者稀あり予ハ其夏
を知らばして渡り岩屋小入りり嶋の半覆小岩屋あり是より
入てまると一丈餘も下る中ハ廣くして横豎二三丈も何とべし
沖の方へぬけ穴あり此所ハ大浪打かりて物凌ましく出る
夏あり難し又中程より左の方へぬけ穴あり是をゆけを高さ所
へ出る岩能小取はき辛くて頂小登る小海中の嶋山四方より
大浪の打くる小山も崩るゝうと思われ身の戦慄して目開
り色ぬ程あり此山黒石ふて岩角あらく足いゝて容易ハ一
歩小進もえがくさき山あり

大若 仙ガ岩の南小あり岸より續きたる一ツの嶋あり魚とる者
の長ありとして頂ふたゞ下棟清くめづらうあるさまふ作あり

住寂する別世界誠小墓の世比外とおもはる是より磯たの山を越して名洗といふ

名洗浦 南面海に向ひたる獵場あり左の方の高神明神の山續き外川の方あり右の山上に鉄炮の臺場あり此山は西の方へ二里許海中に差いで浪打ぎわの巖壁の如く此の所を屍風が浦といふ富士の高峯適う不見へ渡り向の出先の長井と云所あるより夫より飯岡浦九十九里濱より上總安房の浦々へ續く銚子磯をぐるといえる此所にて終る

利根川圖志卷之六終

京都

大坂

江戸

書

林

出雲寺文治郎

勝村治右衛門

河内屋喜兵衛

河内屋茂兵衛

秋田屋太右衛門

須原屋茂兵衛

須原屋伊兵衛

山城屋佐兵衛

岡田屋嘉兵衛

和泉屋吉兵衛

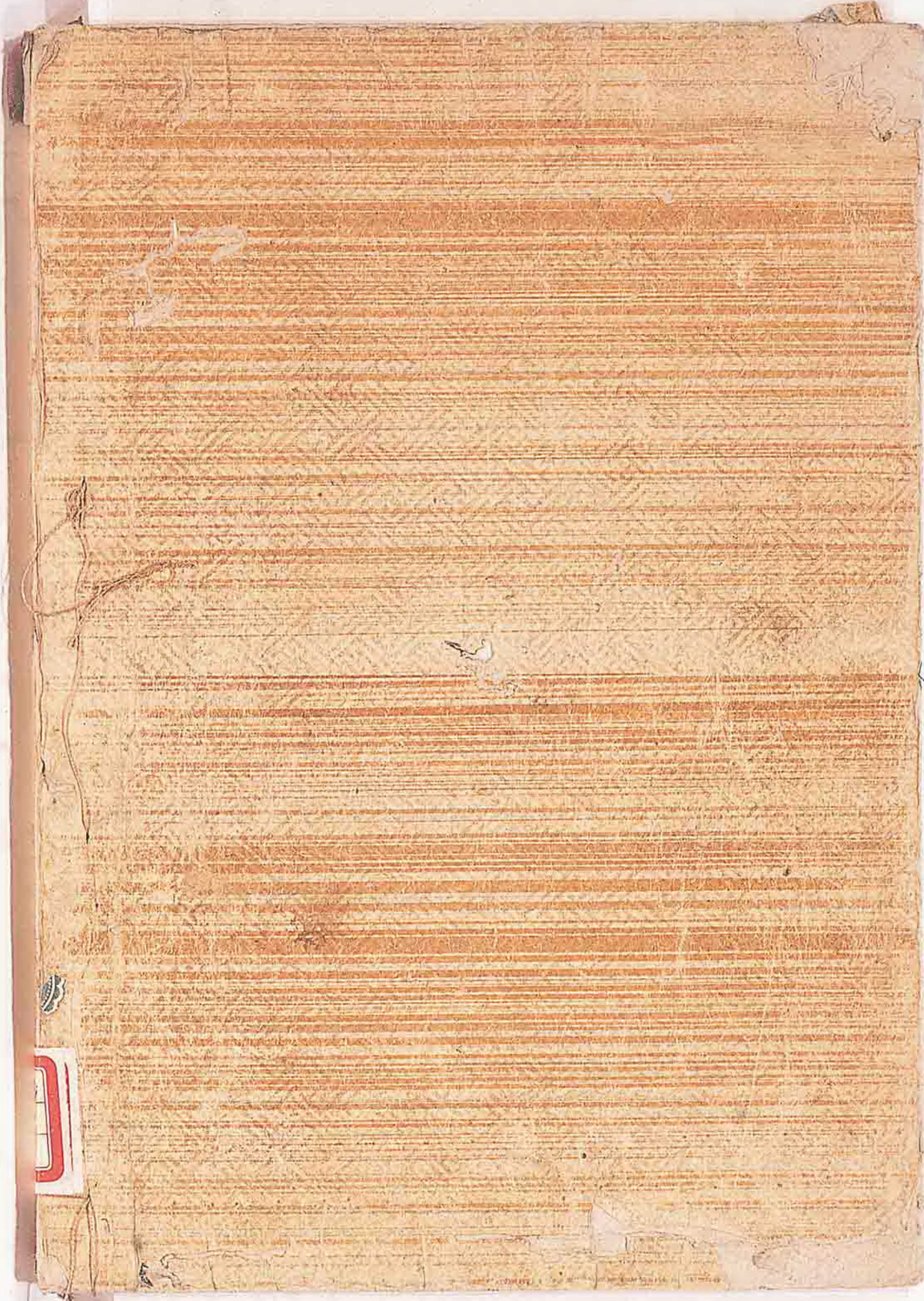
丁子屋平兵衛

出雲寺万治郎

菊泉屋幸三郎

和田屋金右衛門

助



Small white label with a red border, possibly containing a library or archival identification number.